

インターカルチャ

INTERCULTURE

NO.115

2008 年2月 号
FEBRUARY



■■ 学校法人 千里国際学園 Senri International School Foundation (SISF) ■■

千里国際学園中等部・高等部 Senri International School (SIS) 併設 大阪インターナショナルスクール Osaka International School (OIS)
〒562-0032 大阪府箕面市小野原西4丁目4番16号 TEL 072-727-5050 FAX 072-727-5055 URL <http://www.senri.ed.jp>

プレゼンテーション大会開催
公文国際奨学生入選
APAC 音楽祭
英検1級に3名合格



2007/12/11 高等部ホリディ・コンサート

千里国際学園は、帰国生徒を中心に一般日本人生徒や日本の教育を希望する外国人生徒も受け入れて日本の普通教育を行う千里国際学園中等部・高等部 Senri International School (SIS) と、4歳から18歳までの主に外国人児童生徒を対象とする大阪インターナショナルスクール Osaka International School (OIS) とを、同一敷地・校舎内に併設しています。両校は一部の授業や学校行事・クラブ活動・生徒会活動等を合同で行っています。チームスポーツはこの2校で1チームを編成しており、APAC(Asia Pacific Activities Conference) の公式試合や、近隣のインターナショナルスクール、日本の中学・高校との交流試合等に参加しています。このため、校内ではインターナショナルスクールの学校系統に合わせて、6年生～8年生(日本の小学6年生～中学3年生春学期)をミドルスクール(MS)、9年生～12年生(日本の中学3年生秋学期～高校3年生)をハイスクール(HS)と呼んでいます。

18 学期

大迫弘和
SIS 校長

人は子供の頃や学生時代のことをどれくらい思い出すものなのでしょう。中高生と共に毎日を過ごす仕事をしている私などは、多分他の職業の方々よりそのことを思い出すことは多いのではないかと思います。実際に教員になってから 20 年近くの間は、あれこれと自分の思いを書き綴っていた高校時代の雑記帳のようなもののページをよく開いたりしました。「あの頃自分はどんなことを考えていたのだろう。」目の前にいる生徒たちのことがよく分からなくなったりしたときにはそんなことをよくしました。

大学時代のことを思い出すのも職業柄のことでしょう。私は文学部でロシア文学を学びましたが、一学年 5、6 名ほど、学部・大学院全部あわせても 20 名足らずの小さな学科でした。それは将来どんな職業に結びつくか、全く何の保証もない世界でしたが、そんなことはどうでもいい、人生にとって大切な何かをつかむために、学生たちは必死で原書を読み漁るのです。その時、何か正体の分からない人生の本質のようなものを一緒に追いかけていた仲間たちは、今は勿論散り散りになっていますが、あの時の研究室のあの雰囲気と共有したという戦友のような思いで繋がりがあっています。(2007 年、これまで決して多くの読者には読まれなかったドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』が新訳で記録的な売れ行きを残しました。その訳者亀山郁夫さんは研究室でいつも親切にしてくださった先輩でした。今は東京外国語大学の学長を務められています。)

このように、何かを求め、目をぎらぎらさせていただろう学生であった私にとって「この人たちは何のために大学に入ったのだろう」と、どうしても理解しがたい学生たちがいました。刹那的な快楽を追い求め、麻雀に明け暮れ、卒業後は大学名を利用して世の中を渡っていく、そのような学生たち。

私にとって、それらの学生の存在は耐え難いものでした。その思いは、今、SIS の生徒たちに「大学は勉強するために

行くところだよ」というメッセージを送り続けている原点かもしれません。

先日、東京のある私立高校の校長先生とお話する機会がありました。その高校は上に大学があり、生徒の 3 分の 1 が進むことのこと。しかし大学側からはもっと多くの生徒を送ってもらえないかとお願いされているそうです。その高校の出身者が大学入学後よく学んで、卒業論文で高い評価を得る生徒がとても多く出る、逆に一般入試で高い点数で合格した学生は入学後伸びていない、という逆相関がみられたからだそうです。その校長先生はそうに大学に入学後に力を伸ばせる生徒のことを「のびしろのある生徒」と呼んでいました。

この話が全ての大学に当てはまるかどうかは別にして、この「のびしろ」というものは SIS 教育が結果として生み出したいとても大切なものです。

「SIS での学習は大学合格でその役目を終えるようなものではありません。それは、生涯を通して続けていく学び、Learning for Life, その基礎となる学びなのです。」

これはことあるごとに私が繰り返していることばです。そして、本当に多くの生徒たちが、SIS での学びを基礎に、大きな「のびしろ」をもって、卒業後それぞれの学びを深めてくれています。それが、大学合格者数といった数値的なことよりもっともっと大切な SIS の誇りです。

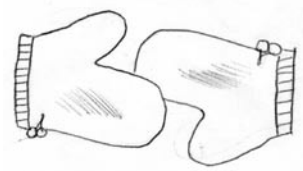
18 学期ということばはお分かりでしょうか。1 年を 3 学期に区切り学期完結制をとっている SIS では 7 年生春学期の 1 学期から 12 年生冬学期の 18 学期までがあります。

さて現在、高等部卒業を控えた最終学期、SIS では 18 学期と呼ばれる学期のあり方について考えることが、SIS に限ったことではなく、おそらく日本全国の、生徒の多くが大学に進学している高校に共通の課題となっています。なぜなら、大学の入試の形が、推薦型・AO 型に大きく傾斜し、冬休み前に進学先が決まる生徒が非常に増えてきているとい

う現実があるからです。(文部科学省が「推薦・AO 入試での入学者の割合を定員の 50% まで認める」という方針を出しています。)

進学先が決まった生徒が、学習のモチベーションを失う……。大学入試の合格でその役割を終える勉強をしている学校なら、それはある意味想定される事柄でしょう。しかし SIS ではどうでしょう。「のびしろ」を大きくもって、もっともっと勉強したい、と SIS を巣立つ彼らにとって、18 学期もまたそれまでの学期と変わらぬ Learning for Life のための学期であるはずです。勿論、18 学期に卒業後進路を切り拓くための奮闘努力を続けている生徒たちもあり、彼らにとっても助けになる 18 学期であることも大切なことです。

SIS ならではの 18 学期のあり様を見定めていければと考えています。



千里国際学園基本方針

千里国際学園では、自分の行動に責任を持ち、よい人間関係を維持していく能力が、生徒各自に備わっていると信じます。この考えにもとづいて、次のような行動の目安がつくられています。

<5つのリスペクト>

自分を大切にする
他の人を大切にする
学習を大切にする
環境を大切にする
リーダーシップを大切にする

もうすぐ All School Production

ミュージカル「ホンク！」 Opening to the public soon!! All School Production “HONK!”

大迫奈佳江

プロダクションチーム代表、OIS、日本語科、音楽科

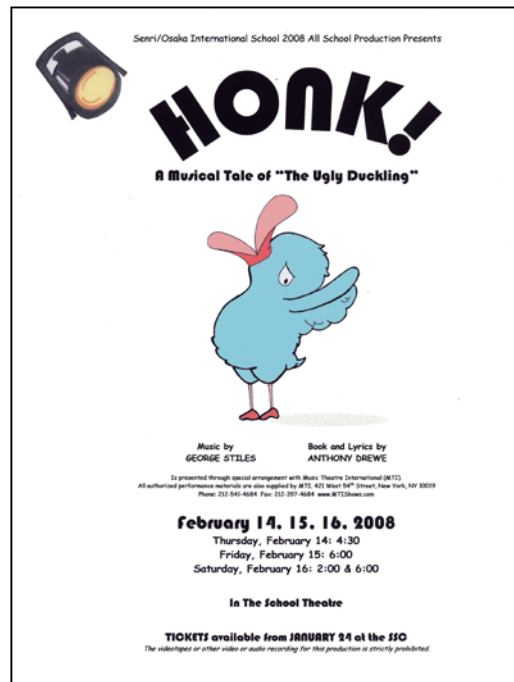
今年のAll School Production “HONK!”の公演は、この『インターカルチャ』がお手元に届く時にはもう目の前に迫っていて、最後の練習に関係者一同、全力を注いでいるところだと思います。ここまで来たら、あとは、Break a leg! (頑張っ
て!) 成功を祈っています!

春学期の『学園祭』、秋学期の『スポーツデー』、そしてこの冬学期の『All School Production』、SISとOISが”Two Schools Together”を実現する大切な行事が、各学期に一回ずつあります。All School Productionは他の二つの行事のように全校生徒が揃って参加できるものではありませんが、一人でも多くの小中高生がかかわることが出来るような演目を選ぶようにしています。またダブルキャストにしたり、演技者・演奏者といった役割の他に、公演を陰で支える様々な役割が用意されたり、一人でも多くの生徒たちが力を合わせてひとつの作品を完成していけるようにプログラムされています。勿論作品のテーマが教育的であることははずせません。

また、先生方だけではなく、多くの保護者の方々・職員の方々のお力添えもなくてはならないものです。スクールコミュニティ全体がさまざまな分野で、さまざまな形で、理解を示していただき、協力していただきます。All School Productionの名がふさわしいと思える所以です。特に今年は衣装のデザインおよび制作を保護者のほうですべて引き受けてくださいました。昨年に続き、三木さんに振り付けをしていただくこともできました。本当に感謝にたえません。

今年も“HONK”という素敵な作品と出会うことが出来ました。どうぞ皆さん奮ってシアターに足をお運びください。観客になってくださることもAll School Productionに参加していただくことに他なりません。どうぞAllの一人におなりください。

プロダクション一同、ご来場を心よりお待ちしております。



ポスター制作

仲谷実理、宮本麻央
(SIS11年)

公演日時

2/14 PM4:30-6:30 Group 1

2/16 PM2:00-4:00 Group 2

2/15 PM6:00-8:00 Group 2

2/16 PM6:00-8:00 Group 1

主な配役

| | Group 1 | Group 2 |
|--------------------------|--------------------------------|-----------------------------|
| UGLY | Kota Ito (SIS 12) | Raymond Palmer (SIS 11) |
| IDA | Mai Fukui (SIS 12) | Lizette Mitamura (OIS 11) |
| CAT | Yuritzi Lopez Amezcua (SIS 12) | Anna Shishikura (OIS 9) |
| DRAKE | Takeshi Sakagami (SIS 9) | Raymond Terhune (OIS 12) |
| TURKEY | Kirara Miyahara (SIS 9) | Shia Yamamoto (OIS 8) |
| MAUREEN | Arie Moriguchi (OIS 11) | Erica Otawara (OIS 11) |
| HENRIETTA | Natsuki Sakagami (SIS 10) | Haruka Yoshizumi (SIS 9) |
| GRACE | Eri Miyamura (SIS 11) | Kate Melville-Rea (OIS 8) |
| MAGGIE PIE | Tina Barolia (SIS 7) | Tina Barolia (SIS 7) |
| GREYLAG | Kento Baba (OIS 9) | Takuya Matsuura (SIS 9) |
| DOT | Mai Mitobe (SIS 12) | Mana Caterina Ikeda (SIS 7) |
| Barnacles/Pinkfoot/Snowy | | |
| | Risa Nishiguchi (SIS 9) | Tsugumi Ishihara (SIS 10) |
| | Yuma Philippe (SIS 9) | Saori Ofuji (SIS 9) |
| | Motoya Fujii (SIS 9) | Tsubasa Akimoto (SIS 9) |
| QUEENIE | Erica Otawara (OIS 11) | Ayla Bobrove (OIS 7) |
| LOWBUTT | Nina Matsumoto (OIS 8) | Sonia Honda (SIS 8) |
| BULLFROG | Raymond Terhune (SIS 12) | Takamichi Baba (SIS 12) |
| PENNY | Kate Melville-Rea (OIS 7) | Rena Kowaki (SIS 8) |

第5回プレゼンテーション大会開催

真砂和典

教務センター、理科

昨年の12月12日に年末恒例となったこの大会が開催された。今回も水曜日のロングホームルームから始めて最初の1時間はSIS 7、8年生全員も聴衆として参加した。大変凝縮された濃い内容で2時間余りがあったという間に過ぎた。参加された皆さん、本当に有難うございました。

保護者の方々が書いてくださった感想をまとめると、

学年が上がるごとに発表も上手になっている。

クレイアニメーションと数学の学習に役立つプログラムには驚いた。高校生でもここまでできるとは…。好きで研究していることは素晴らしい。

はにかみながらのファッションショーも可愛い。自分の服装のコーディネートも素敵でした。

100 km walk は自分の過去をよみがえらせてくれた。

見に来て良かったです。みなさんの努

力の成果が見られて楽しかった。

7、8年生からコンピュータを使って発表できる機会を頂けるなんてSISならではの…。と思う。

生徒にとっていい思い出になる。

SISの授業でも力を入れている部分なのでとても大切な行事。

発表の内容が多岐に渡り、どれもとても面白かった。

発表の前の先生方のコメントや解説が非常によかった。発表の目的やポイントがよくわかった。

参考文献がネット中心になっているものがあつた。じっくりと本を読んで考察することも大切なのではないかな。

パワーポイントの絵や図表は自分で製作したものなののでしょうか？

比較文化の発表がなくて残念だ。

とてもいい発表なのに、第二部は見学



者が少なく残念。聴衆を集める工夫が必要だ。

以上のようになる。

聴衆を集める工夫としてこの大会を授業参観日やインターナショナルフェアと同じ日にするのはどうだろうと考えている。ご意見やアイデアがあればご連絡をお願いします。

【発表内容】

第一部 2:35-

脳内物質にはどのような種類があるのだろうか？

お酒はどうして体に悪いの？

どうして睡眠は取らないといけないのだろうか？

Animals

Animals

みんなの筋肉

アイザック・ニュートン

Fashion Show

G8 保健総合

G8 保健総合

G8 保健総合

G7S English

G7S English

G7 コンピュータ基礎7

知の探検隊 2006年度

G8 HFL2 2006,2007年度

伊沢美海 (G8-2)

下出まゆ (G8-2)

吉田修一 (G8-3)

松浦みづき (G7-1) 戸倉一 (G7-1) 牧

口こころ (G7-2)

山下郁美 (G7-2) 奥野智紀 (G7-3)

松山紫乃 (G7-2)

堂越展也 (G8-1)

荒木ふみ、堂越展也、本田そにあ、中

島彩花、竹田伸太郎、浦上直、山本

薫、山下愛 (G8-1) 細見莉子、宮本英

佳、西茉莉子、与儀春華 (8-3)

第二部 3:50-

カップラーメンについての一考察

クレイアニメーション「トックマ物語」

数学の学習に役立つプログラム

100kmウォーク

Fashion Show

G10保健

Information Technology 3

グラフ電卓プログラミングコンテスト最優秀作

SIS夏のキャンプ 2007

Clothing 1 and 2, 編物 (G11,12)

水沢丈 (G10-3) 中村明日香 (G10-3)

為岡稚子 (G10-3)

飯塚諒 (G12-2)

石神宥真 (G11-1)

半田将一 (G11-3) 井上汎 (G11-3)

佐藤アガサ、岩村果奈 (G11-1) 寺園

史帆 (G11-2) 泉谷直哉、金怜玉、八

尾麻由 (G11-4) 水口紅海 (G12-2)

佐野文香、吉積彩 (G12-3) フィリップ

スラッシュ、奥恵美子 (G12-4)

展示 (シアター前)

「理想の家」住居模型 (G8)

ファッションデザイン画 (G11,12)

製作物 (G10-12)

心の旅 スライドショー

歴史人物カルタ

「おもしろい数学の話題」レポート (G9-12)

HFL2

Clothing

Clothing, 編物

夏のキャンプ

G8 基礎社会2

数学講読

公文国際奨学生入選

松村 愛生さん（高等部1年）

川嶋いずみ

SIS 奨学金事務担当

この奨学金は、財団法人「公文国際奨学財団」が、国際教育の振興に寄与することを目的として、特色ある国際教育の実践を行っている全国の中学校・高等学校に在学している生徒を対象に、毎年秋に募集を行うものです。採用されますと、中学校・高等学校を卒業するまでの間給付され、しかも返還義務がない、という非常に好条件の奨学金制度です。毎年 SIS 生徒の関心度は高く、今年は 23 名の応募者がありました。学内選考の結果、10 年生の松村愛生さんと 9 年生の生徒 1 名が学校代表として推薦され、このたび松村さんが全国で 20 名という難関を見事突破し採用されました。松村さん、おめでとうございます。また、惜しくも選にもれた生徒たちも、来年度以降に再度チャレンジしてもらえとうれしいです。お母さまが「かけがえのない娘からのプレゼントのような作文」とおっしゃっていた松村さんの受賞作文を下記にご紹介致します。（尚、この作文はテーマの性質上、個人情報を含む内容であります、ご本人とご家族のご同意を得た上で掲載させていただきましたことを申し添えます。）

< 2007 年度公文奨学金課題作文テーマ > 『あなたの理想とする親子関係につき、今日までの経験を踏まえながら思うところを述べなさい。』

Be loved person

松村愛生

高等部1年

「スキューバダイビングの免許を一緒に取りに行かない？」これは一昨年夏の夏のこと。「草原を走りたい！乗馬のライセンスと一緒に取りに行かない？」これは今年の夏のこと。母は私を誘っては、新しい挑戦をしています。チャレンジ精神と好奇心旺盛な私たちは、同じ目標を持って頑張ることがよくあります。1mしか泳げない母にとって、スキューバダイビングは本当に大変なことでしたが、親も完璧ではないという姿を見て、いたわる気持ちや親近感がとても強くなりました。金銭だけ出すとか、口出しだけするのではなく、共に、同じ時間を共有することをファーストプライオリティとして過ごしてくれている母は、私の物事に対する体温を上げていく大切な存在です。そうかといって、私が誘いを断ると、母は一人でも行ってしまふ、密着し過ぎない親子関係です。

よく親は、自分のやりたかったことや、できなかったことを子どもにやらせたいと自分の夢を託すようですが、親も自分のやりたいことは自分でやらなくてははいけないと思います。また、子どもの犠牲になる親を、子どもは望んでいないわけですから、お互いのあり方を分かり合うことも大切だと思います。

人は、生まれた時のかわかりが親だけ

だったものから、年齢を増すごとに、大切な人もどんどん増えてきます。親にとってはつまらないことでも、子どもの世界にとっては大事なことがあるということを理解してくれる親は、自分の子ども時代の気持ちを忘れていないのだと思います。親は、子どもを経験しているけれど、子どもはまだ親を経験していないのですから、私が親心を理解することは難しいことです。でも、自分が親にしてみらって良かったことを我が子にしてあげようという心が積み重なって、何代も受け継がれることは、素敵だと思います。

私は今回の作文のテーマが理想の親子関係だと聞いたとき、我家の親子関係が理想的だと思っているので、色々なエピソードが浮かんできて、書きたいことで一杯になりました。ところが、いざ書くこうして鉛筆を握ると、人に読まれることを意識して、一瞬手が止まりました。我家は家族が二人です。7歳で父を失ったので、母と二人で生活しています。もしも理想の親子関係が、頼りになる父親がいて、優しい母親がいて、兄弟姉妹がいる家庭だと定義されるならば、我家は全く当てはまらない形です。私の書く手を止めたのは、我家にこの理想と思われる形がないことを、周囲の人はどう見るのだろうと一瞬考えてしまったからです。



れど、すぐに、「理想に決まった形などなくていいんじゃないか！」と考え直しました。例えば血がつながってなくても、離れて暮らしていても親子です。大家族でも、二人でも、親がいなくて思い出だけでつながっていても親子です。理想の親子関係は、目に見えたり、形のあるものではありません。心の絆です。

母は、私が学校から帰ったときには、「ただいま！おかえり！」と間髪いれず迎えてくれて、物を豊富に与えられるよりも、ずっとずっと価値のある時間と愛情を与えてくれました。親子の絆は、お互いを尊重し、リスペクトする、何にも代えられない宝物であることは言うまでもありません。そして、私たち親子にとって、励ましあって同じ日付の入った免許証を持てたことは大きな宝物になりました。

APAC 音楽祭 2007

APAC コーラス

心からありがとう

小林朋世

高等部2年

最後の APAC となった “APAC choir” は、“最大” な物になったと思う。それはやはり「皆のおかげ」です。歌も衣装も例年以上（？）に工夫を凝らした。歌は「五木の子守唄」「ねんねねむの木子守唄」「Yo le canto to do le dia」を歌った。「子守唄」では人一人が楽器を演奏した。一方の「Yo le can to do le dia」、スペイン語の歌は Arie が考えたスペイン風な踊りをした。衣装のテーマ Erica がデザインしてくれた「和とスペイン」。APAC メンバーは慣れない（？）手つきで衣装作りをしました。特に、Ms. Bertram と Erica を先頭に、Ms. Kanto、Ms. Shishikura、Ms. Matsuda 達が手伝って頂きました。しかも海を越えて Ms. Factra の姪っ子さんには女子の飾りを作って貰いました。APAC 当日では APAC choir の3日間では SIS 12 の福井麻衣、渡場文恵、ロペスユリッチさんは student staff と裏方として手伝ってくれました。APAC 参加校生徒の誘導や雑用に至るすべてを引き受けて頂きました。しかも福井麻衣さんに6校で大合唱した、「荒城の月」では琴を Eri のハーブと一緒に演奏してくれました。3日間の APAC choir では他校の生徒と交流し友達も作ることができました。私たち SOIS の “APAC choir” の中でも “Choir という1つのグループ” としての意識が芽生えたと思います。そして本番。大勢の観客に囲まれて、暖かい声援を浴び、緊張感の中、舞台に立ちました。その日の舞台は…今までで一番 “最高” の物だったと私は感じます。Ms. Factra がよく口にする “Connect with each other” がきっと実現したのです。歌い終わった瞬間の感動、興奮は忘れられません。私達のパフォーマンスが成功したのは私達に関わってくださった皆様のおかげです。衣装に携わってくださった皆様、Staff として手伝ってくれた皆様、3日間 APAC のピアノを伴奏、そしてアドバイスをしてくださった・・・先生、他にも多くの方がいらっしゃいますが、本当に



本当に有難うございました。Ms. Factra と Ms. Osako。本当に有難うございました。また、APAC choir を引っ張ってくれた Arie と Erica、伴奏を担当してくれた Lize、APAC Choir の皆、本当にありがとう。以下にメンバーの感想の一部を紹介します。

—今年が初めてと最後の APAC Choir になってしまいました。学校で練習した2ヶ月間そしてみんなと練習した4日間は一生涯忘れない思い出ができました。Dr. Factora との練習はきつかったけどいつもみんなは笑顔で歌っていた、Ms. Quilichini との4日間もすごく楽しかった。もうこれっきりで APAC がないと考えるととても悲しいです。

(OIS12 Raymond K. Terhune)

—私は今回の APAC Choir で、思い出に残る素敵な経験をたくさんさせてもらうことが出来ました。すべてが初めての事だったので、緊張や不安がなかったとは

言いません。しかし、それ以上に、歌の練習や衣装作りなど、それぞれが貴重な時間を裂いて頑張ったという充実感の方が強く心に残っています。OIS 最後の年に、こんなに楽しい思い出を最高のメンバーと作れて本当に良かったと思います。最後の APAC が大阪で本当に良かった！他校の子達も楽しんでもらえたし、いっぱい友達も出来て、最高に楽しかった4日間でした。

(OIS12 Maya Sadavratl)

—今回の APAC は僕にとって前回のものとは同じ APAC でありながら全く別の物に感じになりました。前回とだいぶ変わったメンバー、初めての女子のホスト、初めての自分だけのパート等と色々大変な事もありましたが、そのおかげか今年は前年以上に学校内、外の人達との交流が持てるようになり、やっぱり僕は歌が好きだ、と言うことを再認識できました。APAC 自体は終わってしまいましたが、こ

れからも歌を通して色々な人達と交流を持っていきたいです。

(SIS11 山田健人)

—今回、私にとって初 APAC の APAC コーラスはとても最高なものになりました。最高のメンバーと最高の先生とカナダからわざわざ来てくれた指揮の先生でこの APAC は高校一番の思い出です。来年からはもうないけれどまたみんなで歌を歌いたいです。

(SIS11 松本光加)



APAC オーケストラ

Momoko Hamaguchi

SIS 12

The APAC Orchestra Festival took place last year at Seoul Foreign School, Seoul, Korea on November 14th -18th. Participants from SOIS were Momoko Hamaguchi(SIS12), Raymond Palmer(SIS11), Yukiko Tahara(SIS10), Mirei Miyachi(SIS10) as 1st Violin; Mari Iwamoto(SIS12), Iku Ogata(SIS9), Karin Yoshikawa(SIS9), Chika Takei(SIS9) as 2nd Violin; Chisato Hayashi(SIS9), Naoya Matsumoto(SIS9) as Viola; Gen Yoshida(SIS11), Erika Terada(SIS11), Sayo Miyao(SIS11), Asuka Nakamura(SIS10) as Cello; Yuko Matsuoka(SIS11), George Sweat(SIS11) as Bass. Having taken part in my third and final APAC Orchestra, I just can say that I learned something important from the every APAC Orchestra. And I'm really glad that Osaka participants are always extremely focused at a high level of music. I could spend an amazing time at

this festival on the coattails of great members, and specially the fantastic conductor. This year was definitely no different.

All rehearsals and the Festival Concert, was lead by guest conductor Mr. Randal Swiggum who lives in Madison. He is in his tenth season as Music Director of the Elgin Youth Symphony Orchestra, the largest and oldest youth orchestra in Northwast Illinois. Mr. Swiggum shared his thoughts and gave us simple messages so that we could understand easily. He had chosen four pieces for this Orchestra Festival Concert, and that were Concert Grosso, op.6, No.3 by G.F. Handel, Elegy by Samuel Jones, Skylife by David Balakrishnan and Scenes from the Emerald Isle arranged by Carrie Lane Gruselle. Before this festival, I actually did not like the piece, Elegy which composed during the dark days that followed the assassination of John F. Kennedy in 1963, is a brief but powerful musical statement of the feeling of grief and shock which swept the country -and indeed,

the world - after the President's death. It's really slow and sad so that almost everyone did not like that piece either. But after the three days of APAC Orchestra kept us working long, hard hours, lots of members like that piece much better than at first. And we had another differ-

ent interesting piece, which called Skylife. Skylife was a huge change from string ensemble at SOIS or previous APACs. You can not really tell that it is different if you just see the music, because it seems normal. But once you listen the piece, you will know that it has a lot of interesting bowing and improvising. We learned a lot of extended techniques; bowslaps, percussive effects and improvisation over a blues scale from this piece. I must say that Skylife has a slow rock/funk feel. I'm really glad that we played Skylife, and this new experience was an important element in making APAC invigorating and memorable. I will never forget this precious moments.

Thank you to all of the APAC directors for organizing such a fantastic event. And I would like to congratulate every one of my fellow members for contributing both effort and fun. Moreover, especially thank for Mr. Secomb's supporting us Osaka members for many weeks before and during APAC Orchestra.



★ APAC とは、Asia Pacific Activities Conference の略称で、次の学校が加盟しています。＜APAC 参加校＞北京インターナショナル・スクール (ISB: 中国)、上海アメリカン・スクール (SAS: 中国)、ブレント・インターナショナル・スクール・マニラ (Brent: フィリピン)、ソウル・フォーリン・スクール (SFS: 韓国)、カナディアン・アカデミー (CA: 神戸)、千里国際学園 (SIS/OIS: 大阪)

<サマーキャンプ2007>職業体験プログラム報告（第3回）

「命をあずかる現場」

第3回目のレポートは、SIS11年新見ゆりさんの「看護師体験」です。通常、医療現場を体験させていただくことは難しいのですが、彼女の真剣な取り組みをみて、病院から特別なご指導をいただきました。

新見ゆり
高等部2年

この夏、私は公立学校共済組合近畿中央病院で3日間の看護体験をさせてもらいました。医療現場はどのように活動しているのか。また看護師の仕事を知りたいと思い、看護体験を選びました。毎年5月12日が看護の日になっているので、7月まで看護体験を受け入れている所は少なく大阪府での看護体験の期間はすでに6月の時点では終了していましたが、緊張しながら近畿中央病院に電話をかけましたが、スムーズに話は決まり病院の方とメールでスケジュールを調節し看護体験をさせてもらえることになりました。近畿中央病院は幅広く患者さんを受け入れている、いろんな科があるということだったので緊張も高まり、早く体験してみたいなという気持ちが強くなりました。看護体験の担当の方はとても親切で事前に、どんなことを体験したいか、何に興味があるのかなどを事前にメールで聞いてくれました。私は遺伝子治療に関することにとても興味があったので、担当の方に話を聞いてみたいと伝えると出来るだけ私の希望に応えられるようにしてくれました。忙しいはずなのに私一人のためにプログラムを組んでもらって、今回の体験を有意義なものにしてくれようと考えて頂き、私もちゃんとやり遂げたいと思いました。

初日の職業体験は初めてのことで良かったです。塚口駅付近から出ているバスに乗り近畿中央病院で降りると、患者さんらしき人たちが何人か同じところで降り、病院へ向かっていました。そして病院に到着し外来の受付へ行くと、すでに15人くらいの人は受付が開くのを待っていました。こんなに早くから病院が開くのを待っている人たちがいるのに驚きました。受け入れ担当の古川さんとお会いし、ま

す看護学生の方たちが普段使用している控え室で介護着に着替えしました。そして総合案内の方へ行き看護体験が始まりました。私はまず病院にきた患者さんが診察を受けるまでの流れを説明してもらい、婦長さんに病院内を案内してもらいました。近畿中央病院は2つの建物がつながっていて外来用と入院用の建物に別れていました。病院内の構造は迷路のようになっていて様々な科があり覚えるのに大変でした。病院内を一通り案内してもらおうと、総合案内の方のお手伝いをさせてもらいました。総合案内での仕事は主に外来にきた患者さんが診察を受けるまでの説明をしたり、何科へ行けばいいのかという相談にのり、困っている人を助けるというような感じでした。さっそく私もお手伝いを始めましたが、なにもかも初めてのことで初めは患者さんに質問をされてもうまく答えられなかったりと対応するのに精一杯でした。また病院の受付機に慣れていない方のお手伝いをするのも大変でした。病院では現在カルテをすべて手書きのものからパソコンに移している最中だそうです。他にも様々な機械を取り入れ、外来にきた患者さんたちにスムーズに診察が受けられるよう工夫がしてありました。でも病院の設備に多く機械を取り入れると便利になる反面、年配の方たちには多少混乱を招いているようです。私がお手伝いをした患者さんの中にも、前の方がよかった。という意見や、機械はよく分らないと言っていた方もいました。やっぱりまだ機械化に慣れていない人が多いと改めて思いました。また病院には本当にいろんな人が訪れ、対応するのに大変な人もいました。例えば駐車場に車を止めるのにすごく並んだ。ということを看護師の方に延々と話したり、あれを改善しろ、と何十分も自分勝手な文句を言ったりとそんなに元気なら何で病院に来るんだろうと疑問に思う人もいました。でも看護師の方は笑顔で対応し、落度もないのに謝りその場をうまく収めていました。そんな患者さんもいれば、逆にこっちを自然と笑顔にさせてくれるような素敵な患者さんも

多くいました。私が道案内をしてあげたら診療が終わってからわざわざ私の所まで来て御礼を言ってくれた人や、体験で来ているということを言うと、がんばってねと言って声をかけて来てくれた人もいて素直にうれしくなるようなこともいっぱいありました。そのあとは看護師の方たちとお昼休みを過しました。休憩所にはお菓子やお土産がいっぱいあって、看護師の方たちもすごく面白くて親切な人たちばかりでした。

午後は入院患者さんの方へ行きました。そこで私が一番びっくりしたことは、患者さんがベットの上で携帯電話を使用していたことです。私が病棟を見学させてもらっている時に携帯で会話をしている人が何人かみられました。病院での携帯の使用は絶対にダメだとずっと思っていたのでなぜ使用しているのか疑問に思い、看護師の方に質問すると、意外な答えが返ってきました。それは一応携帯電話の使用は禁止になっているけど周りに機械もないので毎回毎回うるさく注意することはない。ということでした。たまにタイミングを見て注意することはあるそうです。でも最近は小児科用の病棟にもお年寄りの方が入院しなくてははいけないほど老人の入院患者が増えているそうです。実際小児科病棟に子供の患者さんは2人しかいないそうです。老人の方は長期入院が多いそうなので、家族の方も頻繁に来ることが難しく携帯電話で連絡を取り合うことが増えてしまったそうです。まさか患者さんが携帯を使用しているとは思っていなかったのもこれにはすごく驚きました。その次は患者さんの了解を取り、血圧を測らせてもらいました。初めて血圧計と聴診器を触り使い方を教えてもらいました。普段看護師の方たちは簡単に測っているように見えていたのがあんなに難しいものだとは思いませんでした。一番難しいなと思ったのは、最高血圧と最低血圧の音を聞くことでした。しっかり聞いていてもうまく測れなかったり一気に空気を緩めすぎたりと血圧を測るだけでも難しいことがいっぱいありました。そして今度は看護師さんの血圧も測らせ

てもらいました。やっぱり2回目の方がうまく測ることができ、血圧を測るのはもう完璧だね。と言ってもらえました。そのあとはお風呂に自分で入ることの出来ない患者さんの体をタオルで拭かせてもらいました。患者さんの方から色々話しかけてもらってリラックスしてすることが出来ました。その他は救急で使用するストレッチャーを運び、看護師の方から医師と看護師との複雑な関係の話聞き、患者さんとの関係よりも医師との関係の方が大変ということも聞きました。やっぱり病院には実際にそういう事があるんだなと思いました。1日目の体験はそれで終わりました。

2日目も午前中は総合案内のお手伝いをしました。相変わらずなかと苦情を言ってくるひともいました。2日目は1日目より全体を見ることが出来て自然に対応することが出来ました。全体を見て行動するとより周りの事を理解することが出来て困っている人に自分からどんどん話しかけることが出来ました。休憩時間には看護部長室でお昼を食べさせてもらいました。看護師に関するいろいろな本や雑誌を見せてもらい、中でも面白かったのが。看護服専門の雑誌でした。形から色から本当に様々なものが載っていました。最近はいわくでカラフルな聴診器も発売されているそうです。午後はまた病棟の方へ行きました。患者さんが読む図書ボランティアのお手伝いもしました。外科では潰瘍の手術をした患者さん

の手当てを見学させてもらいました。私は平気で見学していましたが、看護師さんによると体験に来た方でたまに手術後の傷などを見て気分を悪くしてしまう人もいるそうです。私は気分が悪くなるより、手術での傷をホッチキスで止めていたことにびっくりしました。他に集中治療室の中も見学させてもらいました。集中治療室は手術を終えたばかりの患者さんが1泊するところで、機械がたくさん置いてありました。その他にもリラックス効果のある音楽があったり集中治療室の外から中の患者さんの容体を見られるように作られていました。またその時に丁度手術を終えた患者さんがストレッチャーで運ばれてきたので一緒に集中治療室で手当てを見学しました。医師も看護師の方も全員テキパキと働いていて、あっという間に集中治療室での処置が終わりました。そして処置が終わり出る時に中でかける音楽を私に選ばせてくれました。3日目は朝から外科病棟へ行き看護師の方たちの申し送りに参加させてもらいました。ここでは2つのグループに分かれていてそれぞれが患者さんの容体や今日することをまとめていました。その後看護師の方と一緒にシーツ交換をしました。その交換の仕方も難しく独特な敷き方でした。シーツ交換が終わると今度は病室を周り患者さんの体温・血圧を測り、体を拭いたりしました。ガーゼを替えなくてはいけない患者さんがいたのでそのお手伝いもさせてもらいました。休憩を終え外科病

棟に戻ると担当の方がまだいなかったのので医師の方とお話をしました。血液パックや血液を摂取する針などを見せてもらい、病院の事や患者さんの事を聞ききました。外科病棟でつい先日患者さんが一人亡くなったばかりだということも知りました。その後はまた図書ボランティアをして看護師の方に遺伝子治療についていろいろお話を聞きました。近畿中央病院では遺伝子治療というよりカウンセリングを主に行っているということでした。遺伝子治療に関する資料をもらい3日間の看護体験が終わりました。最後に看護部長さんのところへ挨拶に行き、看護体験の簡単な作文を書きました。この3日間だけで得たことがたくさんあり、私がやっても大丈夫なのかな?というような事まで体験させてもらいました。そしてやっぱり人と接する仕事というのは楽しいだけじゃないんだと改めて思いました。病院は常に忙しいにも関わらず様々な体験を3日間もさせてもらい普段見ていた病院だけでなく病院の裏側を見ることが出来ました。看護部長さんや看護師の方、医師の方にまでいろいろな話を聞かせてもらいこの3日間の体験は本当に為になったと思いました。また病院には思っていた以上に様々な人が関わっていてそれぞれが自分のやるべきことをしっかりしていたので、看護師だけでなく他の職業も体験してみたいと思うことが出来ました。この3日間の体験はきつとなにかの形で将来役に立つと思いました。

異動のお知らせ

< SIS 新任 >

Claire Udy (SIS English)

My name is Claire Udy and I am the latest addition to the SIS English department. I am from New Zealand so feel free to ask me any questions relating to sheep and gumboots. I trained as a primary school teacher and then embarked on my first overseas experience to Japan. I intended to stay only one year here but nearly 6 years later, here I still am! I have taught at high schools and junior high schools in north Osaka and I have worked in the Saturday School program for 4 years. I love shopping, karaoke and hiking. I am really happy to be a part of the SOIS staff.

< OIS 新任 >

Caroline Rennie (OIS), Geraldine Margaret O'Connell (OIS)

< 退任 >

Christine Mills (SIS English), Simon Mills (OIS), Andrew Powell (OIS)



冬学期編入生紹介

入学センター

国別

アメリカ 1名

南アフリカ 1名

学年別

11年生 2名



英国大学生生活

浅原杏咲

第13期(2006年)卒業生、Warwick大学
1年

私は、2006年にSISを卒業して、2007年9月にイギリスのWarwick大学に入学しました。この間、イギリスのほうが一学期義務教育が長いので日本の高校卒業証明書では卒業後、直接大学に入れないので1年間のFoundation Courseをシェークスピアの生地であるストラットフォードで受けました。この一年で政治学、経済学、心理学、社会学、英語の5教科、各科目Essay 3つ、Exam 2つを必死でがんばりました。決して楽な一年ではありませんでしたが、今思えば新しい科目をたくさん学んで、いろんな国の友達ができただけで他にも楽なFoundationはあったそうなのですが私はあの一年を決して後悔はしていないし初めてあれだけの達成感を得ました。そしてその一年のがんばりもあり第一希望のWarwick大学の社会学部に入学できました。この大学はMr. ParkerやMs. Brownの母校であり、いまやイギリスでは上位にランクされている大学で私の勉強している社会学部はOxford、Cambridgeに続く3位です。

なによりも私は実際この大学に来て第一希望の大学に来たことがうれしいです。4年前大学を見学して以来ずっと夢見てた大学です。この大学はもとはジャガイモ畑で40年ほど前から大学になりました。その影響かキャンパスは芝生のフィールドがたくさんあり、野生動

物がいたりとてもいい自然環境、勉強環境です。

この大学では、大学生活をどうするかは全て自分しだい。大学の卒業証明がほしいだけならそれはそれ、勉強より遊びたい、いろんな活動に参加したいなど本人しだい。大学生活はおおきくかわります。私の場合この大学に在る限り得られるものは得て、思う存分、人生一度しかない大学生活を楽しもうと思いました。私は6つのサークル、ボランティア、ultimate Frisbee、日本、Warwick TV、乗馬、AIESECにはいっています。そしてこの大学である1週間の大きな国際イベントの最後のパーティー企画担当や浴衣のモデルなどで大忙しです。そのほかにも常に行われている就職フェア、子供を教育に携わる研修、キャンパス内の飲食店のバイト、自分の興味のあるレクチャーなど自分から積極的にいろいろ参加しています。この大学にはチャンスがありふれていて本当に恵まれていると思います。就職に必要なものだけではなく今を楽しむためのスポーツ、ナイトクラブなどさまざまな行事、活動が経験できます。もし自分に当てはまるものがなければもちろん自分でサークルを作ったりイベントを開催したりなんでもできます。



特に私がとてもエンjoyしているのが寮生活。日本では一人暮らしがありきたりなパターンですがこっちは1回生は寮、2回生からは友達とシェアというパターンです。私は今12人とキッチン、トイレ×2、お風呂×2、シャワー×2をシェアしています。一見え？とも思う人が多いと思いますが、なんの問題もありません。とても運よくみんなとてもいい子で仲良しで、いつも料理を作りながら大学の話し、自分の来た地域の話などして毎日楽しんでいます。

ここにきて気づいたのはやはり大学は自由であるということ。でもそれを活かすも活かさないも自分しだい。なので私はそれを活かせるだけ活かして将来につなげます。

* 今月の言葉

折にふれて、気になる言葉を紹介。今回は、韓国の詩人のインド旅行記の中に見つけたことばから。

幸せの秘訣とは、何を失ったかではなく、何を得たかを覚えておくことにある。

私たちがすでに幸せになるために必要なものを持っていることを自覚すること。いま、この瞬間を生かすこと。

猿がゴルフのプレーを妨害したら、猿が球を落とした、まさにその場所からふたたび始めよ！

ほかの人びとが作った秩序に順応するのではなく、自分自身の秩序を発見すること、それを私は自由と呼ぶ。

リュ・シファ『地球星の旅人』より

(青山比呂乃：図書館)



学年だより

● 中部部1年生 (7年生)

お金について学ぶ

真砂 和典

2組担任、理科

映画「ALWAYS 続・三丁目の夕日」を冬休みに見た。昭和30年生まれで、遠くにだが東京タワーを見て育った私には特に懐かしく感じられた。一般的に昔は良かったという気は更々ないが、この映画の中で子供たちがよく家の手伝いをしているのは確かにそうだったし、見習うべきことだと思う。私は小学生時代に平均して1日5時間以上は外で遊んだが、家にいる時は(スポーツ用品店をしていた実家の)店番を主として家の手伝いが最優先事項だった。そこで家族の一員としての自覚が生まれて絆が強まり、仕事やお金についての実体験を持てたという利点もあった。

去年の11月から7年生はお金について学ぶ機会があった。ひとつはミルク募金で、もうひとつは生徒間のお金のやり取りという問題だ。ミルク募金はマザーテレサの思想や活動を学ぶところから始まった。「5円で恵まれない赤ちゃんの1週間分のミルク代になる。」を合言葉に、ポスターと募金箱作りをした。生徒が自主的に取り組み、ユニークな心のこもった作品ができたので学校の各所に貼り、置いた。生徒の代表が校内放送のMMTVで呼びかけたり、朝の職員会議にも来たりした。OISも含めた学校の7年生以上の全クラスの教室にも手分けしてお願いに行った。「何かしなくては…」「自分にもできることがある。」という思いで集めた12万545円と8ドル55セントと110ウォンと20シンガポールセントは5月の学園祭で『働いて』お客様から頂いたお金や生徒インフォメーションセンターに届けられた落とし主の出ない現金も寄付として含まれているのでこのような大金になったが、「金額じゃなくて気持ちが大切。」は皆の心に染み込んだはずだった。

しかし、もうひとつの問題も少し前から時を同じくして進行していた。多分、中学生になって自分で普段からお金を持つようになり、おごったり、おごられたりするところから始まったのだろう。贅沢しているような快感と得たような錯覚が芽生えた

のだろう。お金に対する感覚が麻痺することはとても怖い。大人でもこのような問題はしばしば起こしてしまう。企業と官僚や政治家の話はいつも新聞に出ている。

まずは生徒からじっくり話を聞いた。何が出てくるか恐ろしい時もあったが、渡されたお金を返した人や「そんなことはやめておきなよ。」とまわりで言ってくれた人もいた。ミルク募金の活動は無駄じゃなかったよね。今回はそれを活かせなかった人もこの問題から多くを学んだだろう。いつも言うが、失敗から学ぶこともとても大切だ。失敗しないと本当には判らないことが沢山ある。悔やんでばかりいるのではなく、自分の失敗は自分で引き受けてここをスタート地点にしよう。

3人の7年生が2007年12月18日をもって学校を離れた。1組の蔡熙男、2組の孫正協、3組の福島玲奈は韓国や中国へと家族の転勤に伴って去っていった。SISではこのような別れがしばしばあるが、これが永久の別れ、すべての終わりではない。実際にまた生徒として戻ってきた人もこれまでにいたし、遠く離れていても心が通じるのが友情というものだろう。いつの日か再会して、変わらない点や大きく成長したところに気づき合う関係でいたいと思う。

● 中部部2年生 (8年生)

中学2年生の思い出

加納重美

2組担任、保健体育科

中学高校の6年は、あっという間に過ぎてしまいましたが、その6年間は、私にとって毎日が充実したものでした。今回は、私の中学2年生の頃の思い出を書かせてもらいます。

皆さんは、冬が好きですか。冬と言えど何を思い出しますか。私は、冬と言えば、駅伝を思い出します。陸上競技をしていたので、冬のこの時期が大嫌いでした。

中学時代の部活動の顧問の先生が中長距離の選手だったので、冬のトレーニングは、短距離選手であろうとフィールド競技選手であろうと、そんなこと関係なく長距離の練習に変わりました。私の中学は、その頃大阪で上位を争う陸上競技部だったので、ものすごい練習量と練習メニューでした。だいたい1週間で15～30kmは走っていました。1年生から3年生まで女

子部員が20名ぐらいいたのですが、全員が1000mを4分切るほどで、同じ学年の半分ぐらいの男子よりは断然速かったです。毎年、大阪府の駅伝大会に参加をしていたのですが、駅伝メンバーに選ばれたいような選ばれたくないような、選ばれるとこれ以上の練習が待っているのかと考えると、複雑な気持ちだったことを覚えています。不幸にも、いや幸運にも中学2年生の冬、駅伝メンバーに選ばれてしまいました。

大会は、今も行われているのでしょうか。私たちの頃は、長居競技場の外周、寒い冬の日曜日に行われていました。ものすごい人数の中、出来る限りの良い走りを見せることだけを考え、スタートラインに着きました。しかし、1kmを過ぎた頃からでしょうか。1人抜かれ、2人抜かれ、あっという間に集団の半ば、風邪だけは引かないように言われていたのに、実は大会の数日前から体調を崩し、のどは痛み、鼻水は流れ、最悪のコンディションでした。友達の応援でなんとかゴールまで走りきりましたが、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。今も校外で走っている中学生を見ると、年始年末も休みなく、練習した寒くてつらかった冬を思い出します。

私は、決して長距離が好きではなかったし、得意でもなかったけれど一生懸命取り組みました。その取り組んだことは、結果はどうあれ、今でもあれだけやったんだからこれくらい出来るという自信になっています。学生時代って、勉強にせよ趣味にせよ何事にも一生懸命取り組むことが大切なんじゃないかなと思います。得意とか不得意とかではなく、また何をしたいとか何をすべきとかではなく、やるだけのことはやってみることが大切なんじゃないかな。私は、中学生・高校生という大切な時間を精一杯色んなことに使ってほしいいつも思っています。そして、いつまでも言い続けたいと思っています。

● 中部部3年生 (9年生)

いよいよ中学最後の冬学期

高橋寿弥

1組担任、数学科

楽しかった秋学期の2大イベントの運動会と学年研修旅行がすぎ、冬学期に入りました。もう後僅かで中学生生活も終わります。授業中や学校生活全般におい

て、気の緩みはありませんか？あと数ヶ月の中学生生活、もう一度気を引き締めておくっていきましょうね！イベント関連では、いよいよ卒業式委員会が始動をはじめ、各役割分担がなされ、準備に向けて立ち上がりました。毎年その学年ごとにユニークな卒業式が催されてきましたが、今年度はどのような形で仕上がるのか、楽しみです！きっと個性豊かな生徒が多いので、さぞサプライズを含めた面白いものになることでしょうか？それとも大変厳かな卒業式になるのでしょうか？いずれにしても3年間の生徒の成長の成果の見せ所だと思います。どんな出来栄かは当日を楽しみに待っていますね！！

この3年間で、みんな体も心も大変成長しました。SISの学園生活も思う存分満喫することができました。みんな自信に満ち溢れているんな新しいことに挑戦できてきましたね！これから先、5リスペクトに対する敬意・従順な実践をより高めつつ、高校生活を始められることを心から願っています！！

●高等部1年生（10年生）

進路について

合志智子

1組担任、情報科

10年生ではホームルームの時間を使って、進路についての取り組みを始めました。11月初めに新見先生から、「高校1年生のあなたにできること・してほしいこと」というテーマで、①高校生活を思い切り楽しむ事も大切だけれども、将来にもしっかり目を向け始めましょう、②自分の好きな事・興味のあることをみつけましょう、③ダッシュする日に備えて体力づくり、つまり毎日の学習を大切にしましょう、という話を聞きました。話を聞いた後で、自分の進路について考えている事、疑問に思っていることを書いてもらいました。まだ高校1年の半ばですから、自分の好きなものが何かわからない、好きな分野はこれといった、自分の今のレベルだったらどの大学のどの学部には入れるかわからないから不安だ、というものもかなりありました。この話をきっかけに進路について、じっくり自分自身で考える時間を持つてほしい、その時には、何よりも最初に「自分の好きなこと・興味のあること」をしっかりと見極めてほしいと思っています。

この進路の話聞きながら、自分自身の高校生の頃を思い出してみました。もう30年以上前のことです。私は現在SISで情報科の教員をしているので、学生時代には「情報工学」を学んだと思われることが多いのですが、実はそうではありません。私は物心が付いた頃から生き物が大好きで、昆虫の卵を成虫に育て上げることが大好きな小学生時代をすごしました。その思いは高校生になっても変わらず、大学進学のとくも迷わず「生物学科」を、そして特に動物の行動を学ぶ選択をしました。好きなことを1日中、そして深く学べる学生時代はとても楽しく、当時は120匹ほどの規模だった箕面山滝付近のニホンザル群の全員の顔を、朝から晩までながめて、家系図の名前と共に何日も山へ通って全部覚える（個体識別をしないとできない事があったため）とか、真冬に雪をかき分け張った氷を割って、朝から日暮れまで池にもぐって魚の生態を観察するとか、本物の漁師さん並の腕前になるまで投網を打つ練習をする（上手にならないと本番の川で打たせてもらえないため）とか、好きでない人にはまるでテレビでやっていそうな「罰ゲーム」のようですが、私にとっては楽しくてたまらない至福の時間でした。ですが就職を考える時になって、大学進学のとくも十分予測はしていましたが、この私の好きなことを生かせる仕事で「女子学生でも応募可」という募集は皆無だったため、さんざん悩んだ末、コンピュータメーカーにSEとして就職しました。この時のコンピュータとの出会いが予想以上に良かったため、私のこれまでの人生の半分以上を、日々コンピュータと密着して過ごしています。

今思い返してみると、「一番好きなことをしっかりと学べて良かった」。学生時代に熱中した事は、今でも私に楽しみを運んできてくれます。「万遍なくいろいろな教科を勉強しておいて良かった」。就職時に専門外の分野へ進みましたが、その時に切り捨てた教科がなくてよかったと痛感しました。まさに新見先生が話されたことが、ぴったり当たっていました。

自分の好きなことは自分自身でないと決められません。自分の適性やいろいろな情報も加味しながら良く考えて、自分の進路について一步一步具体的にしていってほしいと思います。

●高等部2年生（11年生）

新年度を前にして、やってきたこと・これからやること

福島浩介

1組担任、国語科

高等部2年生は、三月に学年旅行で台湾に行きます。昨年から、学年の皆の承認を経て選ばれた旅行委員を中心に、皆で考え保護者の皆様へのプレゼンテーションも行い、良い旅行になるのではないかと、「一緒に連れて行かれる」担任団も喜んでおります。この、生徒諸君を中心に作り上げる学年旅行というのは、うちの学校の良い伝統の一つだと思います。八十人を超えるメンバー全員が、またスポンサーでいらっしゃる保護者の皆さん全てが100%満足するプランというのは不可能なので、調べ、話し合いを重ね、自分たちが皆で作上げた旅行だから、皆が責任を持って主体的に参加する。旅行会社のプランを買って、お客様としてサービスを受けるのでは全く違う。運動会や学園祭もそうですが、自分で家で一人で学ぶというのは違い、学校という場所へ通うというのは、こういう、人と人とのコミュニケーションとか、譲り合いとか、協力とか、一緒に何かをするという大事なことを学ぶって部分も多分にあるんじゃないんですかねえ。その方法として、この手作りの学年旅行はとても良い方法であり、機会であると思います。

え〜とそれから、三年生も自由登校の期間（これも昨今の未履修問題の騒ぎなどによって見直されなければならないようですが）に入り、二年生の皆さんも、次は自分たちの番だなぁといった感じがふつふつと沸いてきていますでしょうか？AOとか指定校推薦とか、評定平均が云々とかいった会話、また塾に行かなきゃとか、今からでも間に合うんだろうかとかいった囁きがよく聞かれるようになってきていますのでそうなのかなぁと思います。

昨今、入試方法の多様化で、裏口はまずいですが、正門、玄関だけではなく勝手口や非常口（笑）からの入学もできるようになってきております。入れてくれる時期も複数になっていますね。じゃあ、どの入試方法が一番楽なのでしょう？また、そのために「お得な授業の履修」というのがあるのでしょうか？残念ながら「楽な」「お得な」は無いんじゃないですかねえ…しかし、「自分に合った」入試

方法、「各自に適した」授業の履修という方法はあります。

さて、ここからは春秋戦国時代の諸子百家が用いたような例え話でもって説明をしようかと思います。

◇

ある旦那が、家来たちに酒をくれました。ただ、このお酒、家来みんなで分けるには少なすぎました。(あれあれ、どこかで聞いたことがあるな…) 一人の家来が、「駆けっこで競わないか」と提案しました。足の速い家来達は賛成しました。しかし、足のあまり速くない別の家来が、「そりゃ不公平だ、早口言葉で競おうじゃないか」と別の提案をしました。滑舌のよい家来たちは俄然、有利です。するとまた別の家来が、「いやいやソロバンで決めようよ」といいました。当然、この家来はソロバンが得意だったのです。また、別の家来が「踊りで…」と言い始め、收拾がつかません。すると、下戸であるために、さっきからこの騒動を見守っていた家来が言いました。「1/4は駆けっこ、1/4は早口言葉、1/4はソロバン、1/4は踊りで勝ったものが貰えばいいじゃないか」。先ほどのお酒、全員で分けるには少なすぎましたが、四人ほどが飲むには十分な量だったのです。皆が賛成しました。一人、地面に蛇の絵を描いていた男がいたかどうかは記録に残っていません。

<解説> こうなると、それぞれ自分が得意なもので勝負すればよいわけなので、どんな家来にも勝ち目はあるというわけですね。ただし、1/4の「駆けっこ枠」で競おうという家来達のみを見ると、駆けっこ自慢が集まってくるわけですので、全員が駆けっこで競うという状況より勝負はシビアになります。

では、こういった場合、駆けっこも早口言葉もソロバンも踊りも得意じゃない家来はどうするんだろう… これは、四つのうちどれか努力すれば何とかかなりそうなるものを決めて努力するしかないですね。努力したら何とかなることを見極めて、努力する。もしくは諦める。ま、諦めちゃってもしかたがないので、努力したら何とかかなりそうなることを見極める。例えば、私は身長160cm、体重60kgのやや中年太りです、面目ない。でね、今から身長を180cmにしようとしても、これはどんな努力をしても無理です。でも、

体重を54kgにすることは努力次第で可能。短期間でこれを行おうと思うとビリーさんの新兵キャンプに入隊しなきゃならないので、相当な覚悟と根性が必要。だから、リバウンドしないように無理のない計画を立てて、食事を考え、運動をし、長期間、俺まづ弛まず継続する。

◇

昔、楚の国にロールプレイングゲームが大好きな子がいました。今日も今日とて、新しい、面白い、そしてとても難しいゲームをプレーし始めました。PS3なのかXboxなのかは、記録が残っていないのでわかりません。さらに言うと、この子が今プレーしているゲームには裏ワザも魔法の呪文も全くないのです。難しいゲームですね。さて、このゲームを最後までクリアするためには、経験値を上げ、パワーや道具を増やして勝ち抜いてゆかねばなりません。けれど、この子は、敵キャラに負けるのが嫌だから絶対勝つとわかっているキャラとしか対戦せず、また、負けそうになったらリセットボタンを押して始めからやり直すばかりで、いつまでたってもクリアすることができませんでしたとさ。

<解説> この子が本当にこのゲームをクリアしたかったら、どうするのか？ 手ごわい相手であっても経験値を上げてくれる対戦相手と敢えて戦う、その場面々々の勝負が不利になっても諦めずに、そこから何とか挽回する方法を考え出してゲームを継続する。これしかないのじゃないかなあ。攻略本を読んだり、すでにクリアしちゃった友達に聞くつてもアリですが、それでホントにゲームを楽しめるのかどうかは、ちょっぴり疑問。クリアすることがすべてじゃなくて、ゲームの経過が楽しいわけですから。中学・高校時代ってのは、今後数十年使い続けねばならない脳味噌を使えるだけ使って鍛えておく時期でもあります。その頭の使い方も、自分だけは楽しんで得するにはどうすればいいかなんて、姑息な使い方をしている、どうかなと。人間、日和見しますからね、焦ってる中学生とか高校生がこういう思考をしちゃう可能性はあるので、これは、周りの大人が「おいおい、そういうことじゃいけないよ」とたしなめてあげることが必要ですね。どうせなら、「シビアな競争であっても自分は踊り一本で勝負する」からそれを研ぎ澄ます方向で

使うとか、「一つに絞って勝負するのは逆にしんどいので、駆けっこも早口言葉もソロバンも踊りもまんべんなくやって総合力でいこう」という方向で使うとか、そんな使い方をした方が役に立つんじゃないですかねえ。今その時、楽をしているような気がしても、大変なことしんどいことを先送りしているだけなんだよってことも、これまた周りの大人が忠告してあげなきゃいけないことなのかも。

●高等部3年生(12年生)

どちらに向かいますか？

池田大介

3組担任、社会科

2007年12月4日、OECD(経済協力開発機構)が、加盟国を中心とする、世界57の国・地域の15歳の男女計40万人を対象にした「2006年国際学習到達度調査」の結果を世界同時発表したとのこと。

日本は、どうやら「科学的応用力」に加え、「数学的応用力」、そして、「読解力」、つまり、全分野で、それらのレベルをかなりの勢いで落としたようだ。

新聞各紙を読み比べてみると、<「一つの答えを求める正解主義」・「一答主義」からの脱却がまだまだはかられていない>、云々…果ては、<「読み書き計算」という古い学力観を重視する傾向があるが、これは時代錯誤>、等々。

本当にそうなのかなあ…(独言)…さてさて。

ところで。

特に学校で、然し、学校に限らず、ラジオ・TVの番組編成、本屋の特定のコーナーでは、論理的思考力が伴わずとも展開でき得る“ある分野(群)”が、占有度大きく、まさに大きな顔をしてのさばっている(ような気がする)。例えば、“その”答えに到達(近付く?否、近付こうと)するまでの過程こそが重要であり(その状態が、最初であり・最後であり・全てであるとは思わないが…)、また、その分野の研究者の・その研究部分において、その研究過程では、それは、手法的にきつとあるにはあるのだろうが、中学・高校段階における科目授業レベルでは、それは排除(というよりは、それを学ぶ段階にまで至らず[←単に、赤

(次ページ★に続く)

地震と図書館

青山比呂乃

図書館

これは、1995年1月17日の朝の千里国際学園図書館の写真です。そう、あの阪神淡路大震災の時、学校に来てみたらこういう状態になっていたのです。この後、学内で待機していた先生方が働いてくださって、本はあっという間に本棚へ戻すことが出来ました。

当時神戸方面の状態があまりに大変で、箕面のあたりの被害（大型テレビが飛んできた、食器棚が倒れて中身が全てこなごなになったなど）はそれほど報道もされず、記録も余り残っていないと思います。今の生徒の皆さんは、この震災の時には、日本にいなかったり、いたとしても小さかったので良く覚えていないのではないのでしょうか。

当時「関西では地震はありませんから」という業者のちょっと無責任な認識もあって、本棚は床に固定されてもおらず、後ろの書庫の本や新聞が乗せてあった棚は倒れ、表の書架でもかなりの本がこの写真のように下に落ちていました。もしもこれが昼間で、本棚の間に誰かいるときだったら、と思うとゾッとします。その後、倒れていた書架は、しっかり床にボルト

止めされました。しかし、地震で大きくゆれた時、本が飛び出してくるのは止められません。

日本は一説には地震の活動期に入ったといわれます。自分の命を守るには、まず一人一人の自覚が必要です。緊急の際に、どのように行動するべきかを知っているだけでも違うと思うので、次のことをいつも避難訓練時に実行するようにして地震に備えてください。

1. 地震、と思ったら、すぐに机の下に潜る。
…本が飛んできてぶつからないように。
…万一窓ガラスが割れ、本棚が倒れてきても、あたらないように。
2. ゆれた時、本棚の間にいたら、すぐに出て机の下へ。本棚の間には常に座り込まない習慣をつける。
3. ゆれた時、ドアや窓は開けたままにしておく。
4. ゆれが一旦収まったら、おしゃべりを一切せず速やかに避難する。
…放送を聞いて避難経路に火事がないか確認する。



(★前ページの続き)

ちゃんが、成長の過程の中で、様々なことを会得する、というレベルに過ぎない？))、技術的な習得に、結果として終わっている（ような気がする）。しかも、“(大学)入試”等で、その分野が、諸々の“分野(学部・学科・専攻?)”に限らず、これまた大きな顔をのさばっている（のだから、救いようがない）。

なぜ、そこまで、その分野がもてはやされるのか（、理解不能である）。

ところが、話はそれだけでは終わらない。

好奇心を持ち、興味をもたげさせ、ゼロからスタートし、手を使い、足でかせぎ、時間と労力を使い、そして得た能力でもなければ、思考の過程もなく・もちろん理論性もない…にも拘らず、相対としてのコチラ側が、自己の責めに帰さない普

通の状態に比して、アチラ側は、普通の状態です。で“できてしまっている”が故に、構造的に上下関係を生ぜしめ（←意味不明!?!）、結果として、アチラ側に、あたかも、何らかの、例えば、能力があるかのように世間では扱われ、もてはやされる…

勘違いも甚だしい（嫉妬、とも…）。

その分野こそが、実は、(きっと)批判の矛先たる「読み書き計算」の範疇であるにも拘らず…

しかし。

今度は、逆に。

「読み書き計算」なくして、本当に思考力云々を問うことができるのか（「読み書き計算」が知識を得る原初的な方法論としての、これまた意味不明の〔?〕、安易で・短絡的で・安直な前提〔!?!〕）。

知識の体系的積み上げ型一般教養論者：池田としては、答えは、「読み書き計算」あってこそ…

やばいやばい。そろそろやめておこう（かな!?!でも、取り敢えず、両方の立場から説いたぞ!?!）…!

最後に、「国際学習到達度調査」は、『知識や教養を使って何ができるかを試す』為に、「読み書き計算」等、基礎学力の試験が全く出題されなかった、ってさ…

ふうん…

さて。

12年生の皆さん。

多くの人が（将来的に）進学することになるのですが（きっと）、「どちらに向かいます?」か?

…卒業式は、『2008年3月1日』。

英検1級に3名合格

水口 香

英語科

英語資格試験の報告

2007年12月10日までに報告があった2007年度第2回英語検定試験の合格者数をお知らせいたします。

1級 3名
準1級 2名
2級 1名
準2級 5名
3級 3名

英検1級に、谷修造君(SIS9年)、林ちさとさん(SIS9年)、井藤汐里さん(OIS9年)が合格しました。おめでとうございます。更なる目標に向かってがんばってください。

コンテスト受賞の報告

映画「ミス・ポター」字幕翻訳コンクールでSIS12年生の松原由佳さんが角川映画賞を受賞しました。また第4回SII中学・高校洋楽翻訳選手権ではSIS12年生の和田樹実さんが佳作を受賞しました。おめでとうございます。

今回は特別に紙面をいただき、「ミス・ポター」字幕翻訳コンクールで角川映画賞を受賞、またSISに入学して以来6年間、各種の英語試験に挑戦してきた松原由佳さんに、彼女の取り組みについて語っていただきました。日々英語学習に励んでいる皆さん、また新たな目標を求めている皆さんの参考になればと思います。

「英語資格試験の挑戦」

松原由佳

高等部3年

登山家になぜ山に登り続けるのかと聞けば、「そこに山があるからだ」と一般的に言われるように、私は英語検定にはまってしまったのかも知れない。

当初帰国子女だから簡単に取れると思っていた英検も、準1級までは思ったように簡単に取れた。しかし、さすがに7年の冬に受験した1級では躓いてしまった。私は英語が好きで、英語が出来ると自信を持って言えるようになりたい、そして皆にわかる基準で証明したいという思いがあったので、英検1級はどうしても取得したいと思った。結果として、英検1級は3~4回目にして合格することができ



英検1級に合格した谷修造君、林ちさとさん、井藤汐里さん

た。

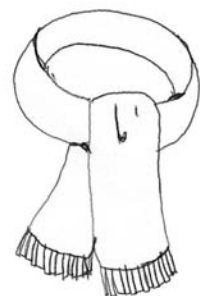
また、8年生の時に国連英検のことを知った。英検とは違うシステムだったので受けてみたいと思いB級を受験したところ、一次試験に合格した。当時はB級にも2次試験(面接)があった。ある程度の英会話が出来たら大丈夫だと聞いていたので簡単に通るだろうと気楽に考えていた。しかし、質問内容が国連特有のものだったためかなり苦戦した。運よく合格したが、難しいという印象が残った。10年生の時MUN(模擬国連)の授業を取ったことで、国連活動に強い関心を持つようになった。この授業で身に着けた知識を活かしたいと思い11年時にA級と特A級をダブル受験した。A級は通ったが、特A級は不合格だった。英語自体は理解でき、授業でやった覚えがあるのだが答えがわからなかった。悔しくて特Aを再チャレンジした。2回目もまた1次試験が不合格だったが、確実に合格点に近づいたと実感した。「次こそは!」という意気込みで、現在英字新聞の時事問題やTIME誌を読んでいる。

TOEFLは、大学受験に関係がないが、世界的な基準というだけでなく、大学に入学後、交換留学に必要な条件であるため受験している。TOEFLは、英検や国連英検とは異なり、読解力や理解力を求める問題が多く、アメリカで受けた授業を思い出した。また、結果が合格ではなく、セクションごとに点数で出てくるため、自分の苦手な分野が分った。

そうすると「もう少し取れるのではないかと新たな欲求が生まれた。このテストは世界中で実施されているテストなので海外の友達とも競い合える。これも刺激となっている。

一般生として学校に入ってきた友達が急激に英語力を伸ばし、どんどん追いついていくような思いが常にある。そのため、今の私にどれだけ英語力があるのかを客観的に多様な角度から評価してほしいという気持ちで、各種英語検定を挑戦するきっかけになっているのだと思う。

●学校を通して受験しなかった場合や、他の検定試験結果も掲載いたします。編集部までお知らせください。



Everyone wins in Saber Debate Series

Peter Heimer

English

Do you think Japan should abolish capital punishment? Do you agree that Sports Day teams should be mixed-grade teams?

These two timely and important questions were debated by 10 SIS high school students in the 12th annual Saber Debate Series held during the third week of November. The students spent the first part of the fall trimester honing their public speaking skills by giving informative, opinion, and persuasive speeches. They then explored the art of debate, learning the rules of this “speaking and thinking contest” before showing off their talent for language and logic. In the end, all debate teams prepared well, spoke well, thought well, and argued well. And dressed well, too.

Though debate is a speaking and thinking contest, and though contests

generally have winners and losers, in SIS debate everybody is a winner. As Russian Nobel Peace Prize winner Andrei Sakharov said, “Profound thoughts arise only in debate when there is a possibility of expressing not only correct ideas but also dubious ideas.” In the 2007 Saber Debate Series, the students raised many profound thoughts and expressed both correct and dubious ideas, all in a second language. They should be proud of their efforts; their teacher is.

Special thanks to the debate audiences: Mr. Mills’ 7th grade students and Ms. Melville-Rea’s 6th grade class.

By the way, don’t you think that because ice cream is unhealthy, expensive and messy, that SOIS should stop the sale of this tasty but harmful dessert to unwitting students?



Well dressed and well spoken SIS debate students

フランス語資格試験優秀賞表彰式

フランス大使館文化担当官・フランス総領事が来校

本校生徒が昨年春の「DEL F」(Le Diplôme d'études en langue française)と「DALF」(le Diplôme approfondi de langue française)というフランス語の資格試験で合格し、ひとつの学校から一挙に7名の合格者を出すことは極めて稀有で優秀とのことから、主催者を代表して、フランス大使館文化担当官 ジャン＝フランソワ・ロシャル氏と、在大阪・神戸 フランス総領事のアラン・ナウム氏および2名の担当官が11/14(水)に来校され、3F 会議室で表彰が行われました。合格者は次の通りです。

フィリップ勇真(SIS9) 前田雄也(SIS9) 浦上優(SIS11) 松本明子(SIS12) 洪知仙(SIS12) 佐野文香(SIS12) 福井麻衣(SIS12)

すでに最難関の DALF C2 に合格している亀井潤君(SIS11)に詳しく聞きました。

「DEL F, DALF はフランス文部省認定フランス語資格試験で、DEL F A1,A2,B1,B2, DALF C1,C2 と順に難しくなります。DEL F は B2 を合格すると DALF へと進むことが期待されます。DALF ではフランス語での高度なレベルの聞き取り、読解、文書作成、口頭表現の能力が試されます。このディプロマを C1 まで取得すると、フランスの大学を受験する際、フランス語能力評価試験が免除されるほか、日本では、フランス政府給費留学生試験の一部が免除されます。」



手洗いをがんばろう！！

弥永千穂

スクールナース

さてもう少しで寒い冬も終わりますが体調は大丈夫でしょうか？これから冬学期が終わるまで、油断せずしっかりかぜやインフルエンザを予防していきましょう。ところで、みなさん病気予防の基本の手洗い、きちんとできていますか？ちゃちゃっとお水で手を軽くこすってすすぐ「ちゃちゃっとさん」ではありませんか？特にこの時期はかぜをひいた人がせきをカバーしたウィルスのついた手でつり革やドアノブを触り、それをあなたが触り、鼻をこする・・・こういう流れでかぜのウィルスをもらってしまいます。またトイレのレバーやドアノブなどでノロウィルスなどの感染性胃腸炎はうつってしまうことがあります。もちろん身体にウィルスが入っても自分の免疫力が働いてみんながみんな病気になるわけではありません。でも手洗いの習慣は、かぜやインフルエンザ、そして食中毒の予防においてもとても大切です。ちゃちゃってすませる時もあるのですが、特に乗り物にのった後、トイレの後、食事の前、スナックの前、学校に着いたら、お家に着いたらがんばってしっかり洗いきましょうね。私が日ごろ行っている手洗い方法をよかつたら参考にしてください。手を水にぬらして石けんを泡立てて①手のひら：5カウント②左手の甲：5カウント、右手の甲：5カウント ③指の間（指と指をからめて洗います）：5カウント④右指先（指先を丸めて反対の手のひらの上でこすります）5カウント、左指先5カウント⑤右手首5カウント、左手首5カウント しっかりすすぎ、しっかりふきます。これを基本にももちろんこのカウントが早い時も短い時もあります。私の場合、みなさんの基本の手洗いタイミングに加えて保健室でのケアの後に毎回手洗いをします。ケアした生徒の状況によって手洗いの長さも変わるわけです。この学校で7年間勤めていますがいまだインフルエンザにかからず、かぜでお休みしていないのもこの手洗い効果かな？お互いがんばりましょうね。

クロカン・駅伝で活躍

馬場博史

ランニングクラブ・トライアスロンクラブ顧問、数学科

■万博クロスカントリー大会

12/23（日）万博陸上競技場。▽高校男子の部 5km 216 名中 10 位小澤悠（SIS11）▽中学の部 5km 完走 池田憲治（SIS9）、檜木耀、鍋島詩織、櫛野弘奈、秋山裕理（以上 SIS7）

■吹田市民駅伝競争大会

1/14（祝）万博記念公園。▽高校男子の部（各4km）1位高校男子チーム【Raymond Terhune（OIS12）、小澤悠、春名暢（以上 SIS11）、高橋直人、清水稜太（以上 SIS10）】▽高校女子の部（各2km）1位高校女子チーム【津高毬絵、小林朋世（以上 SIS11）、森岡瑛美、為岡稚子、阪上夏希（以上 SIS10）】▽中学男子の部（各3km）29 位中学男子チーム【Kento Baba（OIS9）、田和良真（SIS8）、藤見洋佑、檜木耀（以上 SIS7）】



恒例の吹田市民駅伝競走大会

編集後記

私が高校を卒業する頃は、推薦入試など皆無に近い時代でした。受験生はほぼ全員が2月、3月まで一生懸命勉強していました。先日、中央教育審議会が大学への推薦入試も学力テストを導入するよう求める提言をまとめました。背景には大学生の学力低下問題があります。今年の大学1年生は約4割が筆記試験を受けずに入学していて、約6割の大学で高校段階の補習を行っているそうです。SISの12年生は最後の冬学期まで多くの生徒が授業を受けいています。高校でしっかりと学習し、必要な力を確実に身につけて卒業してほしいと願っています。（馬場博史）

今年の冬は暖冬だと言われ、すっかり暖かい毎日に油断をしていましたら、冬期休暇明けの頃からとても寒くなってきました。校舎の3階からよく見える箕面の山々は、雪で真っ白です。インフルエンザは、今シーズンは早くから流行すると言う当初の予測は当たらず、今のところ学校付近の地域は流行の兆しが無く、こちらはほっとしています。これだけ科学技術が日々目覚しく発達していても、自然現象は予測がなかなか難しいものですね。ついでに、2月20日頃に箕面あたりへ来るというスギ花粉前線の予報も、飛び切り良いほうへ外れてくれるとうれしいのですが。（合志智子）

インターカルチャーへの記事・ご感想等は、e-mail で hbaba@senri.ed.jp までお送り下さい。インターカルチャーはバックナンバーも含めて本学園ホームページ www.senri.ed.jp/interculture でもご覧いただけます。また広報センター担当の学園ホームページにつきましてのご意見・ご感想などもお待ちしております。

編集：SIS 広報センター 保護者会だより編集：保護者会広報委員 カット：イラストレーションクラブ生徒

保護者会だより

●「保護者会だより」文責：保護者会 Public Relations Committee
ホームページアドレス <http://www.sispa.jp>

保護者会活動報告・予定

保護者会の活動を次の通り報告いたします。

■Board

◎第五回定例会

12月6日(木) 10:30～3階会議室
学校から大迫校長先生とルイス事務長のお話と各委員会からの活動報告。
「特別会計」の使い道についての話し合いがもたれました。

インターナショナルフェア委員会からフェアの報告がありました。

◎第六回定例会

1月10日(木) 10:30～3階会議室
学校から大迫校長先生とルイス事務長のお話と各委員会からの活動報告。
前回に引き続き、「特別会計」の使い道についての話し合いがもたれました。

◎第七回定例会

2月7日(木) 10:30～3階会議室予定

大迫校長先生のお話 @ 定例会

帰国生の受け入れ高校の校長会に出席してきました。この校長会は、現在国内に5つある受け入れ専門校が、常に連絡や親睦を深めておくのはいいいことだと考え、私が提案したものです。

5校とはICU高校(国際基督教大学高等学校)と東京学芸大学付属大泉校舎で東京に2校。愛知県に南山国際高等学校。京都に同志社国際高等学校。そして、一番新しい私たちSISです。ICUが設立された折、帰国生徒と一般生の割合を2:1が妥当だろうとされました。それは、帰国生は、帰国生といっても一人一人はいろいろな国や地域から帰ってくるので、多く設定するほうが精神的に安定するだろうと思われたからです。その後、開校された同志社国際高等学校などでも、その考え方が取り入れられ、大体同様の割合で生徒を迎えています。SISについても、初代校長の藤澤先生は、長いICU高校での実績を導入・実践されましたので同じような観点に立っています。ただし、ここにはOISがありますので帰国生と一般生に外国人生徒が加わるという、独特の構成比になっています。

この校長会で、私は、この5校がとてもよく似ているなと思うことがありました。それは、帰国生は学校に対して「自分たちのホーム」という意識を強くもっているということです。卒業後に学校に訪れる回数が多かったり、「日本に帰国した」という意識より“SISに帰ってきた”という意識を強く持っていたり、友達に会うなら学校へ行けばいいと、SISを拠り所にしてしているところです。そして、その感覚は、いつしか一般生も同様にもってくれているようです。保護者の方にも同じ思いはないでしょうか。以前プラハのインターに転校していかれた生徒の保護者の方からレターを頂きインターカルチャーに掲載させていただいたことがあります。「プラハのインター校は親にとっても孤独感を忘れさせ、暖かく安心できるコミュニティーで、気持ちのほっとする場所です。それはSISと通じているものがあります。」という内容でした。皆様もこのように、学校に来れば話の合う人がいる、生き生きできるなどと、感じてくださっていただければいいと思います。

このように、学校と生徒または学校と保護者の気持ちが密になる中で、皆様保護者の方々には、いつもいろいろなお手伝いを安心してお願いすることができると思っています。SISの保護者会は、理想的な形で学校を支えてくださっていると、その校長会でも話してきました。

■Hospitality Committee

秋のAPACでは、ボランティア・ドネーションのお菓子など、多大なご協力を頂き、お陰さまで喜んでいただけのサービスをすることが出来ました。また、メイプルホールでの冬季コンサートでもたくさんのドネーションを頂き、有難うございました。保護者の皆様に、深く感謝いたしております。
後は、2月にオールスクールプロダクションのティーサービスを残すだけとなりました。よろしくお願いいたします。

■Network Committee

秋学期に入ってから年内に、6地区で計7回親睦会が開催されました。
世帯数がかかなり多くなった地区の地区分割を検討し、2月の新旧リーダー会の開催に向け、新地区リーダーを選定中です。

■International Fair Committee

11月23日 インターナショナルフェア開催。『Around The World』をテーマに国際色豊かなフェアでした。収益金約75万円は学校に寄付し生徒たちのための学校設備充実に使われます。

11月30日 SOISフェア委員合同反省会。

12月10日 両校長先生主催のThanks Party が開催されました。

■Public Relations Committee

12月 インターカルチャー115号編集・校正、ホームページ運営。

1月 116号編集、ホームページ運営。
ホームページにて、新企画<07sispaふぉーらむ>を始めました。内容は…是非、ホームページをご覧ください。

定例会は保護者の方のどなたでも出席していただけます。たくさんの方の参加をお待ちしています。

フェアを振りかえって

2007年度SOISフェア委員会

佐々木 千香

2007年SOISインターナショナルフェア『Around The World』、ご協力本当にありがとうございました。

去る11月23日(金) Two School Together 「二つの学校が常にひとつになろうと努力することが、生徒たちにとって大きな利益になると信じる」とする両校の『建学の理念』の実践のひとつとしてOIS/SIS合同フェア委員会主催・インターナショナルフェアを両校保護者の熱意をもって盛大に開催させていただくことが出来ました。あたたかく見守ってくださった大迫校長先生、キャリン・カフィン校長先生、ルイス事務局長はじめ学校関係者の皆様、本当にありがとうございました。また、ご来場下さいました皆様、ご尽力いただいた保護者の皆様に心より御礼申し上げます。

今年は例年問題になる来校者車両乗り入れによる近隣トラブルが一切なく終了することが出来ました。駐車場ボランティアのお力と度々のレターによる呼びかけを皆様のご理解下さったものとフェア委員会一同感謝しております。

今年度のテーマである『Around The World』に添って国際色豊かな、華やかなエンターテイメントを催すことができ、ご好評いただいたことを大変嬉しく思います。ご出演いただいた出演者の皆様ありがとうございました。毎年行っている寄贈品バザーは皆様のご好意の賜物で今年も大きな利益をもたらすことが出来ました。出店ブースもまた国際色豊かでアイデアに富み、和やかに親睦を深めながらそれぞれがそれぞれに大きな収益を計し寄贈品収入とあわ

せ総額約75万円を両校に寄付させていただくことが出来ました。

今年もエコ啓発活動は例年通りのゴミを出さないイベント作りを目指しました。また2年間続けたレンタルリユース食器を使つてのエコ活動の問題点に真剣に向き合い両校フェア委員の度重なる協議のうえで抜本的な改革を行いました。それはリユース食器を購入し学校設備の食器洗浄機で洗って衛生的に再使用するという試みでした。世界的にも環境問題は日増しに感心が高まっています。市区町村主催のイベントや学校のイベントでも使い捨て食器の使用をやめリユース食器を使うところが増えてきています。今年いろいろとアドバイスをいただいたNPO団体「リユース食器のABC」坂東淳子様からは、リユース食器を保護者団体が購入してまでエコ活動に取り組んでいる私たちと、洗浄の為の設備を快く提供して下さった学校に賛辞と敬意のお言葉をいただきました。リユース食器を持つ日本ではじめての保護者会になったかも知れません。当初心配されていた食器がまわらないのではなどというトラブルもなく、稼動出来た事を本当に嬉しく思っています。

皆様のご協力と過去2年の実績のおかげで、リユース食器を使ったこのようなイベントにおける食器の紛失率、全国平均2%から10%を下まわり1%未満の0.8%という結果でした。このようなリユース食器を使う取り組みは循環型社会形成を推進していくひとつの方法です！循環型社会とは、ゴミを限りなく少なくし、そのことでゴミの焼却や埋め立て処分による環境への悪い影響を極力減らすことと限りある地球の資源を有効に繰り返し使う社会のことで、基本は『3R』活動です。

『3R』の実践は大切なことです。

『3R』とは「リサイクル (Recycle)・リユース (Reuse)・リデュース (Reduce)」をさします。ゴミと資源に関わる問題を解決する“キーワード”です。リサイクル(再利用)・リユース(再使用)は聞きなれていらっしゃると思いますが、リデュースこそが地球にもっともやさしい『R』です。これは、私たちが取り組んでいるゴミ0作戦の基本理念です。“捨てる”こと自体を見直すこと。必要のないものは買わない、使い捨てのものやポーションなどゴミになりそうなものは使用しない、持ちこまないなど、ものの量を“減らす”ことです。ゴミの量を減らすにはもっとも簡単で効果のある考えかたです。ゴミ持ちかえりの推奨も有効的です。例えばキャンプ場でも公共のゴミ箱があると持ちこまれるゴミは増えます。でもゴミ箱がなければゴミ持ちかえりのために個々は工夫をしますし、その環境は守られます。私たちは学校で開催するイベントだという利点を生かして保護者が生徒たちの模範となれるようなプランニングを遂行いたしました。今年はSOIS生徒会10名Akira Moriguchi、Yuma Kennedy、Arisa Nishimura、Sun-min Lee、Mai Iida、荒井 遙、亀井 潤、山口 留以、梁井 彩、佐々木 愛(…敬称略)が生徒を代表して最後までエコ活動に協力したことをご報告させていただきます。生徒たちも生徒主催で学園祭など数々のイベントをします。エコ活動を間近でみることによって生徒の中でも循環型社会形成について啓蒙していただければと願いますし、私たち保護者はいつも真剣に『やって・みせる』『やらせて・みせる』を実践したいものです。また『3R』に「リフューズ(Refuse)」「リペア (Repair)」を加えて『5R』という考え方もあります。「リフューズ」は断る、「リペア」は修理すると言う

意味です。過剰な包装や、コンビニで割り箸やスプーンを断る。壊れたものは捨てずに修理して長く使うと言ったことです。フェアのパンフレットに掲載しました『地球にやさしく！エコロジーってなんだろう！！』ひとりひとりが正しく理解し、出来ることを考えて実践し積み重ねていく。それが悲鳴をあげている地球に私た

ちのできることです。今後も私たちのインターナショナルフェアのエコ啓発活動は保護者全体の取り組みとして続けられることを願います。

最後に、フェア全般数々のボランティアにご参加くださった皆様、食器洗浄と最終の後片付けに絶大なるご協力をいただいた有志ボランティ

アの方々、エコ見回り隊として食器回収にご協力いただいたボランティアの皆様本当にありがとうございました。両校保護者が一丸となって来年、再来年とインターナショナルフェアがよりいっそう両校の親睦を深め、生徒の模範となれるコミュニティ形成をつくる場として盛大に開催されますことを心より祈念いたします。

PHOTO CORNER



11月23日 インターナショナルフェア



11月16日 APAC音楽祭 コーラス
@カフェテリア バンケットの様子



12月11日 高等部ホリデーコンサート
@メイプルホール ティーサービス

2007年度PRコミッティ特集記事

卒業生は今? Vol. 3 ～ 卒業生からの便り 社会人編～

今回で3回目の特集です。社会人になられた卒業生からの記事です。

一般枠でS I Sに入学され海外の大学を卒業された卒業生、海外で育ちS I Sから日本の大学を卒業された卒業生等の、現在の職業にたどり着くまでの興味深い記事になりました。

S I Sの卒業生たちを通して、子供たちが受けてきたS I Sの教育が見えてきたような気がします。
(PR委員 矢野 祐利香)

- Q 1. 現在に至るまでの道のり
Q 2. S I Sで学んだ事で役にたっている事
Q 3. 今の仕事を選んだ理由、またそれはいつ決めたか (大学選びを含めて)
Q 4. S I Sの生徒達へのアドバイス
Q 5. その他何かあれば

今田 順子さん

(S I S 2003 年卒 Temple 大学卒業
横浜インターナショナルスクール教師)

A 1. 私がS I Sに入学したのは、今から10年以上も前になります。私は、一般生の枠で中学一年生の時にS I Sの生徒になりました。S I Sでは、好きな授業を沢山とっていました。私の場合は、英語とスポーツでした。放課後は、スポーツクラブと生徒会に入り、有意義な時間を過ごしていました。その他に、J F Kでガイドとして働いたり、またカナダで行われたサマーキャンプなどにも参加しました。S I Sを卒業してからは、アメリカのフィラデルフィアにあるTemple 大学に進学しました。そこでは、心理学を専攻し、水泳クラブに所属していました。また、長い夏休みを利用し、2回インターンシップを経験しました。そして、晴れて今年の5月に卒業し、現在は関東にあるインターナショナルスクールで教師をしています。

A 2. S I Sが私の原点であり、S I Sに行っていたからこそ今の私が存在していると確信しています。自分がS I Sで学んだことは数え切れません。ここではあえて、教科書にはのっていない3つの事について書かせていただきます。

まずは、5つのリスペクトです。これは、世界中のどこへいっても私のベースとなっています。自分、他人、

勉強、環境、リーダーシップを大切にすること、世界の人々が共に生きていく上で必要なことだと思います。アメリカで生活をするにあたって、もちろん沢山の文化や価値観、視点の違いを目の当たりにしました。それでも、この5つを忘れず、まっすぐにぶつかれば、お互いを受け入れることができるのではないかと思います。

二つ目は、今でも私が連絡を取っている先生方から教わったことです。その先生方が教えてくれた大切なことは、‘心を込めて話をする’ということです。温かい心を持つ先生方が、私に述べられた様々な言葉は今でも、私を幾度となく支えてくれました。それに気が付いた時、私もそんな人間になろうと思いました。このことは、これからの自分の人生の中で、必ず役に立つことだと確信しています。

そして最後に私はS I Sで‘諦めない’ということを学びました。これは放課後のクラブや生徒会も含め、日常生活の中で学んだことです。自分に負けなければ、必ず道は見えてくる。それは今現在でも感じています。S I Sは夢で溢れていますが、現実とは少し違います。色々な考えを持った人が存在し、それは決して自分が尊敬、尊重できるものばかりではありません。そんな時、周りの波に流されるのではなく、自分を信じて諦めないことができるようになったのは、S I Sでの時間があったからです。

A 3. 私が高校二年生だった頃、私には夢がありました。それは、今やっている仕事とはかけ離れた‘看護師’という仕事でした。何度も日本の看護大学のオープンキャンパスに参加しました。しかし、何処か違和感を覚え、自分が受けたと思う看護大学を探すことができませんでした。そんな時に進路の先生に「よし、順子、日本から離れてみいひんか?」と言われました。その時は、「え? 3週間以上海外に滞在したことない自分が?!」と思っていました。しかし、大学を受験する時に専攻を決めなくてもよいというメリット等、アメリカの大学の特徴を調べたところ、自分には合っているのではないだろうかと感じました。そこで、アメリカの大学へ行くことを決心しました。

看護を勉強するつもりで渡米した自分が、看護学よりも魅力を感じたのは、1年生の時に取った心理学の授業でした。奥深い心理学の世界へ私は吸い込まれ、4年間かけて心理学を勉強することにしました。心理学の中でも、私は発達心理学と臨床心理学に重点をおいていました。

さて、なんの仕事をしよう?と考える始めたとき、まず頭に浮かんだことは、‘心を大切にできる仕事がしたい’ということでした。自分に嘘をつくことなく、ありのままの自分を活かせる場所を私は探していました。そんな時、思い出したのがS I Sを卒業してからずっとお世話になっ



ている先生のことでした。その先生が私に与えてくれたことを、私も誰かに伝えたいと思うようになりました。言い換えれば、心を込めて子供と関わって行き、大切な何かを気づかせる機会を与えたいということでした。そこで私は、「教師」という道を選びました。

A 4. 大した事は申し上げられませんが、今を大切に、自分を大切に、心を大切に S I S での有意義な生活を送って下さい。何かに迷った時は、周りにいる友達、先生方、家族に相談して下さい。そんなふうに時間を過ごすことができれば、将来もきっとすばらしいものになると思います。



実藤 可奈さん

(S I S 2003 年卒)

Berklee College of Music (Contemporary Writing& Production 学部) 卒業
Sony Music Entertainment Japan 就職予定)

A 1. 私は S I S 卒業後、Temple University に進学しました。S I S には一般枠で入り、入学までは英語なんて全く話せない状態だったので、12 年生で進路を決める時まで自分が海外の大学へ行くという事など夢にも思っていませんでした。私がこの大学へ進学を決めた理由は大きく分けて 3 つあります。1 つは幼少の頃からやっていた音楽を勉強したいという思いがあったのですが、日本では行きたいと思う音楽大学が見つからなかった事。2 つ目はかなりの専門分野になってしまうので、本当に音楽でいいのだろうかという迷いが 12 年生の時点でまだあった事。その点、アメリカの大学は入る時に専攻を決める必要がなく、教養科目を取りながら 1 年程ゆっくりと将来を考える時間がある事に魅力を感じました。そして最後に、やはりいきなり

海外の大学行くのは不安だったので Temple University には東京キャンパスというのがあり、日本にしながら英語での授業に慣れる事ができるので安心感を持つ事ができました。S I S 卒業後、最初の 2 学期を東京キャンパスで過ごし、3 学期目から本校であるフィラデルフィアキャンパスに移りましたが、やはり 1 年経っても音楽を専攻したいという気持ちが強くあったので 2 年目からはボストンにある Berklee College of Music という音楽大学に編入しました。

この大学で専攻を音楽制作に決め、クラシック、ジャズ、映画音楽、ポップスなど様々な音楽ジャンルの作曲、編曲、レコーディング方法などを学びました。在学中は学校外でも自分のデモ CD を作ったり、インターシップとして倉木麻衣さんなどの制作をしているアメリカ人プロデューサーのアシスタントとして働いたり、インディーズレーベルの営業をしたり、と様々な経験を積む事ができました。2006 年 12 月に大学を卒業後、2007 年 5 月に大阪に帰国し、音楽制作や通訳のバイトなどをしながら日本で就職活動を行いました。現在、2008 年 4 月からレコード会社の Sony Music Entertainment Japan で働く事が決まっています。

A 2. アメリカの大学進学という事で、S I S は他の中高に比べて英語を学べる環境が整っていたという点は良かったと思いますが、正直そんなのは実際行ったらどうにかなるものだと思います。言葉や知識は結局はただのツールであり、S I S ではそれらを実際に使って生きていく為の能力の基礎を身につける時間を過ごせた事が私にとっては大きい事です。それは「対人とのコミュニケーション力」だったり、「自分の進みたい道を自分で切り開いて行きたい」だったり、「恐れずに新しい

事に挑戦する行動力」だったりすると思います。こうやって言葉で並べるとなんだかすごい事のように思えますが、S I S という特殊な環境で毎日過ごしていると自然に身に付いてくる力だと思います。昔、田中守先生が「S I S はエリート養成学校やから」と授業中におっしゃった事があり、当時はピンときませんでした。卒業してからその意味が分かったような気がします。現在やりたい事を精一杯できて、充実した毎日を過ごしている自分がいるのは、その為に必要な力を S I S で育む事ができたからだだと思います。そんな素晴らしい「学ぶ環境」を提供してくださった S I S の先生方、S I S に通わせてくれた親には本当に感謝しています。また、S I S で一生付き合っていきたいと思える素晴らしい友達と出会えた事も自分の人生にとって大きな財産です。S I S / O I S の同学年の友達、先輩、後輩とは卒業後も頻りに連絡をとって会っています。私の周りではアメリカの大学へ進学した人も多かったのですが、皆が住んでいる所の間をとって NY で同窓会なんて事もありました。昔からの友達は会うと思えば会ってしまいがちですが、S I S の友達は皆それぞれ自分の道を突き進んでいて、会う度に良い刺激を与えてくれます。なかには S I S 在学時にはあまり話した事がなかったのに卒業後、初めてじっくり喋ったら気が合って仲良くなったなんて友達もいます。年末には 8 学年から卒業生が集う S I S / O I S 同窓会が開催されるのでとても楽しみにしています。

A 3. 幼少の頃からクラシックピアノをやっていて、S I S の入学面接では「将来の夢はピアニストになる事」と言った記憶があります。小さい頃から漠然と音楽に関わる職業に就こうとは決めていました。それは音楽が自分にとって一番身近で一

番好きなモノだったからだと思います。やはり自分が好きな事を仕事にするのが一番だと思ったので、音楽大学に進み、就職活動も音楽関係の仕事に絞って行いました。音楽で世界を変える事はできないかもしれないけど、すごく落ち込んでる人が音楽を聞いた時に「明日は少しはいい日になるかもしれない」と思える位の力はあると思っています。これからしばらくはレコード会社勤務という事で「音楽ビジネス」というフィールドで働く事になりますが、将来的にはビジネスだけではなくて、音楽を通して国際社会や教育に関わっていく事ができたらと思っているので、何年か働いた後に音楽社会学／音楽教育学／音楽環境学などが学べる大学院に進学するかもしれません。

A 4. 「S I Sはとても恵まれた環境だという事を忘れずに後悔のない学園生活を送って下さい」、なんて言いません。そういう事は後になってから気付く事で、今は皆さんそれぞれ思春期特有の感情、悩み、友達関係、恋愛で頭がいっぱいなのではないでしょうか？そんな毎日の生活の中で、心でいっぱい感じて、頭でいっぱい考えて下さい。答えなんてすぐには見つからない事の方が多いですが、真剣に悩みと向き合えば不思議と何か道が出来ていくものだと私は感じました。そして卒業後、振り返った時に後悔するような「恥ずかしくて思い出したくない！」って事を沢山経験してください。私はそんな事が山ほどあります(笑)。でも中高生の時はなんでも経験しないよりはした方が絶対いいと思います。私は今になって、「S I Sって本当にいい学校だったな」と思いますが、実際高校の時は毎日学校へ行行って人に会うのが億劫になった時期もあって、多分学年で1、2を争う遅刻、欠席の多い生徒でしたし、先生達にも今思えばかなり生意気な

事を言っていた気がします。(先生方すみませんでした。今になってやっと分かる事がたくさんあります。)当時は自分に全く自信を持てずにいたし、将来への不安でいっぱいでした。ただ、学校を休んで1日中ピアノを弾いたり、本を読んだり、映画を見ながら悩んだり考えたりしていた時間は、自分を確立していく上で必要な時間だったと思っています。決して、「サボりの勧め」をしている訳ではないのですが、焦らず自分のペースで進んでいって下さい。日本社会では皆が同じ時期に一齐に学校へ入学し、卒業し、そして就職しますが、その基準に合わせたり、勝手に制限した枠の中で自分の人生を決めるのは勿体ないと思います。私は行き当たりばったりで大学も途中で変わったし、同学年の人達とは、大学卒業時期も、就職活動を始めた時期も違います。そして特別に優れた才能があるという訳でもありません。でもマイペースにその都度自分ができるベストを尽くしていたら自然に進む方向が定まっていたという感じです。今はどんどん自分の人生が面白くなっていて、年を重ねていくのが楽しいですし、「まあどこへ行ってもなんとかやってけるだろう」位の自信は持てるようになりました。今自分がいる環境は5年前にS I Sの生徒だった時には全く予期していなかった事ばかりです。これから大きくなっていく皆さんに、少しだけの先輩として「大人になっていくのはなかなか楽しいですよ!」という事だけは伝えたいです。S I Sを卒業してから在学期間が重なっていない先輩達とも何人か知り合う事ができました。同じようにいつかどこかで皆さんに出会える日が来る事を楽しみにしています。

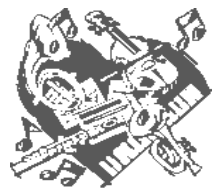
A 5.

連絡先: kanasanefuji@hotmail.com
* 3月末までになってしまいましたが、

個人でピアノの先生をしているので生徒を募集しています。クラシック、ポップス、映画音楽など自分の好きな曲を楽しんで弾きたいという方ぜひご連絡下さい。クラスは日本語または英語で、日時はご相談にのります。

* 京都の三条ラジオカフェというコミュニティFMラジオ局で働いています。主に京都でのイベントやライブなどを紹介する番組です。何かラジオで紹介したい事がある方はぜひ情報を下さい。

* その他、この原稿を読んで興味を持って下さった方はどなたでも気軽にメール下さい。



文 和年さん

(S I S 2002 年卒 同志社大学社会学部卒業 現在 看護専門学校在学)

私は同志社大学社会学部を卒業し、現在は看護専門学校で学んでいます。きっと、これを読むS I Sの皆さんにとっては高校卒業後の大学受験に向けて頭を悩ませている人が多いと思うので、大学を卒業してなお新たな勉強を始めている私の道が参考になるかは不明ですが、書いてみたいと思います。そもそも、私だってS I Sにいたころから大学卒業まで、自分がまた別の勉強をしに学校に通うなんて夢にも考えていませんでした。

まず私の大学受験から遡ってみたいと思います。私は高3で受験を迎えても、とくにやりたいことや、やりたい仕事はありませんでした。それでも大学に行った理由は、今だから言いますがただ「なんとなく」だったように思います。大学の選び方というと、自分のやりたい勉強や仕事に直結、あるいは関連した大学を選ぶという、まず自分の「やりたいこ

とありき」で大学選びをすることを世間では推奨し、先行されがちですが、(もちろんそれは理想的で、素敵だと思います)「やりたいこと」を見つけている高校生の方が少なく、私のようにただ「なんとなく」な学生のほうが圧倒的に多いはずで。なので、やりたいことはわからなくても、なんとなくでも、「何かをやっている」ことが大事なのだと今となれば思います。受験に向かって一生懸命取り組んだことは今でも私の誇りとなっていますし、「大学を卒業する」ということは人生において貴重な体験だったと思います。また、様々な人と関わっていく中で、大学教育を受けた／受けていない、の差というものが実際感じるところがあり、「なんとなく」でも大学できちんと勉強してよかったなと思います。

何かやりたいことでもみつければいいなと考えながら大学生活を過ごした私。そうこうするうちに就職活動の時期を迎えていました。もちろん卒業後は就職をするつもりでいましたので、就職活動をしました。しかし、ここにいたってもやりたいと思う仕事にも出会えず、さすがに焦り始めました。さらに、就職という人生の一大事において妥協はしたくない、何でもやってみて自分の納得のいく仕事をしたい、という頑固でこだわり屋な性格が、もっと自分を追い込んでいきました。そのせいで周りの友人はどんどん内定していく中、自分だけが取り残されていきました。それでも、いろんな企業を回り、面接を受け、自分探しを続けました。しかし、どうして自分は、ここまで妥協が出来ないのだろうと真剣に考

在しないのだと気づいてきたのです。私にとって就職すること自体が妥協だったような気がします。

なぜそう思ったのかというと・・・ここにきてようやく看護の道が登場し話は一転しますが、私の両親は医療者で、幼い頃から、健康上何かあったときは頼りになり、常に安心感があり、それは私にとって当たり前環境としてありました。しかしです。両親が老いて、私が自立して・・・と将来のことをリアルに想像してみたとき、医療者としての両親の支えがなくなる将来に対し、漠然とした不安を抱いていました。健康とは、全ての幸福の基盤となるのに、それを守れなくなるということは、私にとって大きな不安でした。だからといって、自分は人の命を預かるような尊い仕事は怖くて出来ないし、どうしようかと頭の隅で考えることがしばしばありました。しかし、いざ社会に放り出されようとするときになって、切羽詰まってようやく、どんなことを差し置いてでもやらなければ後悔するだろうことが見つかったのです。それは親孝行でした。ただ老後の世話をするというのではなく、きちんとした医療知識、医療行為をもってそれをしたいと思うのです。今思うと、看護という仕事、その前に厳しい勉強に立ち向かう覚悟がどうしてもなく、他に自分の道があるはずだと思って就職活動をしていたように思います。大学4年間と就職活動を経たことは、遠回りではありましたが、看護を志す覚悟を決めるためには欠かせない時間でした。この過程があったからこそ、自分が本当にすべきことを見つけられたのだと思います。正直言うと、看護という職業は、決してキレイな仕事ではないし、看護に対して華やかな夢を抱いているわけでもなく、今はやってみたいと思う仕事、楽しそうだなと思う仕事他にあります。しかし、人生において後悔なくやり遂

げたいと思うことは、看護をもって両親の健康、家族の健康、自分の健康を守ることです。

一生懸命進路を選ぶことは重要ですが、今決める進路がすべてではありません。後になってもどうにでも道は切り開けると思います。その為には大きなパワーを要しますが・・・ぜひ、進路について悩んでいる人がいれば、そんな自分を肯定して、自分探しの一過程だと思って、一度力を抜いて考えてみてほしいと思います。

最後に、S I Sで学んだことで今役に立っていることはというと・・・Respectという精神です。看護学校では、体のこと、病気のことを学ぶと思いますが、患者の理解、対象理解という考え方の授業がほとんどで、患者の個別性、個性を尊重し、その人にとってどのような援助が必要かを考えることが、看護をする上で一番大切であると学んでいます。S I Sで学んだ、「違い」の違いとして認め、受け入れ、Respectする姿勢が、看護ではとても大切となってきます。個人差、個別性を尊重するということはどういうことかと、S I Sでさんざん学んだことを思い出しながら、実習に出向いたりもしました。S I Sでの学びは今も生きています。

中川 雅子さん

(S I S 1999 年卒業)

奈良女子大学大学院 スポーツ科学専攻修了
国立大学法人奈良女子大学附属中等教育
学校教師)

「S I Sがくれたもの」

1992 年 9 月、私は S I S に編入学した。帰国するまでの 5 年半、私が育った国は台湾。S I S の先生方は驚かれるかも知れないが、小学生の頃の私はまるで協調性がなく集団スポーツが苦手な嫌い、一人で黙々とピアノを弾く事や絵を描く事が好



きなインドアな子供だった。そんな子供が現在、保健体育教員をしているなんて自分でもびっくりである。人が自身の道を決めるときには、色んなことが重なるもので、その最初のきっかけを与えてくれたのがS I Sだった。人はきっかけがなければ、自分が好きなことを発見できないし、そのきっかけにいくつ出会うかで道も変わってくる。また、興味関心はいずれ、個性や強みに変わり、自己を形成していくものだ。

ところで、現在私が働いているのは国立大学法人奈良女子大学附属中等教育学校という中高一貫校である。まだ2年目の新米だが、毎日楽しく、やりがいを感じながら仕事ができるのは、本校にS I Sと似ている部分があるからだろう。学校が生徒や教師、そして教育の「自由」を大切にしているところ、また生徒個人にあった能力を伸ばすあらゆるチャンスが与えられるという点が非常に似ている。S I Sでは授業、クラブ活動、学校行事のどれをとっても、生徒の可能性や興味関心を最大限に引き伸ばしてくれるきっかけが豊富だった。

私がS I Sで得たきっかけはたくさんあるが、今の進路から考えると影響が大きかったのは、P Eやシーズン制スポーツだろう。集団スポーツに触れたのは、クラブでのサッカーがはじめだった。チャレンジしてみれば、とにかく面白く、その後はバレーボール、ソフトボールなど様々なスポーツに取り組んだ。それぞれのスポーツであらゆる友達もできた。一方、P Eでは伸び伸びとした環境で色んなスポーツを体験し、自ら動くこと、チャレンジすることの楽しさを学んだ。2つの活動のおかげで少しずつ協調性も身についた。子供ながらにスポーツや運動はコミュニケーションのツールとして働くものだと思えたのもこの時だった。

このS I Sでのきっかけをもとに、私はスポーツや運動というものを「す

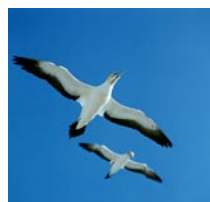
る」だけではなく、もっと多面的に学問として学びたいと考え始めた。98年にS I Sを卒業し、奈良女子大学に進学した。専攻はスポーツ科学。スポーツに関わる社会学、教育学、歴史、心理学、生理学などなど幅広く学んだ。その中でも、昔から人体の構造や働きに大変興味があった私は、運動生理学という分野を専門に研究した。研究室では、もっぱら人体実験を繰り返し、学校に泊まることもしばしばあった…が楽しかった。大学卒業後は、もう少し研究をと思い、同大学院へ進学した。

学生時代に最も悩んだことは進路だ。研究職を目指すか、あるいは教職を目指すか。私は教師を目指して大学を選んだわけではないが、大学の授業やS I Sでの教育実習を通して教職への関心も深まった。悩んだあげく、とりあえずは研究職の強い方へ進んだ。研究室の先輩の紹介で岐阜

県の病院に就職し、厚生労働省が実施している生活習慣病予備軍を対象にした健康促進プログラムの開発に2年間携わった。予備軍の方にどういった運動や食事指導が必要かを考え、プログラムを作成し、実行、検証するというまさに学生時代の実験や研究の延長のようで、学んだことが活かされる楽しい職場だった。しかし、何よりやりがいを感じたのは、毎日多くの患者さんとコミュニケーションを図り、場を共有することだった。データとにらみ合い、何かを見出す研究も好きだったが、それだけの毎日よりも、人と話をして何かを教えることの方が自分らしく居られることに気付いた。そんな時に、病院での活動が評価され、大学時代の教授から声をかけて頂いたのをきっかけに教職の道へ方向転換し、今に至るわけである。

私のこれまでの道のりを振り返ると、節目節目で決定的に人との関わりが

大きな役割を果たしている。人との関わりを大切に、また自身の武器にできたのも、やはりS I Sで培われた自己表現力があってこそだと考える。S I Sは環境そのものが、「異」の要素をたくさんもっている。それは、生徒や教師のナショナルリティだったり、文化、習慣、そして思考である。私たちS I S生徒の強みは、知らないうちにお互いの「異」を認め、受け入れられる点にあると考える。また、「自由」な環境の影響も強い。一人一人異なるのが当たり前、かつ全てが自己責任という「自由」という環境の中だからこそ、各自の判断に基づいた思考を持ち、それを個性として表現する力が育成される。また、与えられるきっかけが多いほど表現の幅は広がるといえるだろう。



私が今、一卒業生として、また一教師としてS I Sの生徒に伝えたいのは、この学校にいる間にきっかけを大切に色んな事へチャレンジし、長期的な目で自己表現力を高め続けて欲しいということだ。迷ったらとりあえずは飛び込むべき。なぜなら、S I Sはあなた方を最大限にサポートしてくれる教師や仲間がいる最強の環境なのだから。卒業して10年近くが経つが、この10年間、そしてこれからもS I Sでの友達や先生方は私にとってよい理解者であると同時に「異」の要素をもったよいライバルである。S I Sで得た全ては私の誇りであり、今後も私という人間を形成し続けていくだろう。

12月12日 S I Sプレゼンテーション大会がシアターにて開催されました。真砂先生による、その時の記事が今月号インターカルチュアに掲載されています。保護者の感想も取り上げて下さっていますので、是非ご覧ください。

温故知新

3年前、11歳だった娘と共にはじめて訪れたS I S。閑静な住宅街に独特の外観を見せて佇む校舎は、休日での気配もなく・・・そと玄関扉から中を覗き込んだ目に映ったのは、天井高く吹き抜けた開放的な玄関ホールと広々とした図書館でした。もちろん興味を持って訪れたS I Sでしたが、娘はその日の“出会い”でS I Sが気に入り、自宅から1時間半はかかるであろうその学校に入りたいと言うのです。なぜでしょう。実は私も、パンフレットを見ていた時とはまた違う、何か心惹かれるものを感じていました。そして3年。S I Sに息づく沢山の“こだわり”が少しずつ見えてきました。その原点はどこにあるのでしょうか？今回、恥ずかしながらこの特集がなければ知ることのなかった学校創設期の大変なご苦労、そして柔軟でありながらきっぱりとした藤澤先生の熱い思い・・・私はそこに、あの日心惹かれたS I Sの原点を感じます。

“温故知新”の第三回は、生徒募集と入試、年間行事の計画、学習指導案作成、さらにコンピュータ選び、図書館に置く和書・洋書の取り寄せ、教員の住宅選び等、いよいよ開校が間近に迫ってきます。中でも断固とした意志を持って実現された、常勤カウンセラーの先生が存在を有り難く心強く思うのは、きっと私だけではないと思います。



(PR委員 伊沢 由紀)



千里国際学園創設の時期を回顧して～その3～

元大阪国際文化中学校・高等学校校長 藤澤 皖^{かん}



5、教育内容の準備と最初の入学試験

①設立準備室の設定

開校予定の一年前には、教員や事務職員になる人たちが準備のできた人から、大阪に集まった。1条校は4月から、インターナショナルスクールは9月または8月からである。梅田の阪急ビルの文技研の部屋では、手狭である。そのため、梅田に近いところのビルの一室を借りた。そこで、備品の準備、教育内容の検討や募集要項などを作成した。

②スクール・カレンダー作成

年間の行事予定表も作成しなければならない。授業日数として、180日は確保する必要がある。インターナショナルスクールでは、スクール・カレンダーを作成して、生徒にも持たせ、授業日には授業を行う。急に行事などに変更することはない。もし、急な事情で変更した方がよいときには、教員会議でその旨決定しなければならない。大抵の行事は、授業日には数えない土曜日に計画するのである。コンサートやリサイタル、それにミュージカルなどの音楽会は、平日の夜に組み入れるので、授業

日には影響しない。180日の授業日数では少ないようであるが、実際には、土曜日の行事や夜間の行事などが別にあるので、もっと多くなっているといえよう。年間行事予定表を印刷して公表するのであるから、随時時間割を変更して、学校行事を行う日本の一般の学校とは違う。事前の準備も年間変えなくて済むように慎重に決めなければならない。

③学習指導案の作成

授業の内容については、日本では学習指導要領があるので、教科書や教師用指導書を参考にすればよい。教科書選択が大きな仕事となるだけである。英語科については、教科書では、やさしすぎる生徒が多いかもしれないので、帰国生の多いICU高校の教材などを参考にした。生徒によって英語力が異なる。それぞれの英語力に合わせなければならないので、レベル別に、多くの教材を用意しておく必要があった。教える準備も多様になるので、教員の負担は大きくなる。帰国生教育の一つの課題である。他の外国語もほぼ同様である。インターナショナルスクールでは、大体の達成目標はあっても、学習指導要

領という都合のよいものはない。各教科の主任が年間指導計画をたてるのである。双方の学校が共に授業を行う、美術や音楽などの主任は、アメリカ人の先生になったので、日本の文部省が発行していた学習指導要領の英語版（現在は発行していない）も参考にしてもらった。各主任は、独自の指導案を作成し、この計画でよいかと了解を求めにきた。

インターナショナルスクールの Gr.11 と Gr.12 は、国際バカロレア（IB）の指定による指導を行わなければならない。IB事務局（IBO）と連絡をとる IB コーディネーターを決めておいたが、結構教材選びなどには苦労していた。勉強する意味、科目履修の意味などを問う「認識論」（Theory of Knowledge）という教科（？）は、IB 独特のよい教科ではあっても、初めての教科だけに教える側にもとまどいがあった。教養の幅が広く要求されるので、一人で教えることは難しいのである。結局、理系・文系、何人かの先生で教えることになった。

④生徒募集と入試

一方、学校の広報活動や入学試験場の確保もしなければならない。新校舎は一年間の突貫工事であったので、試験場としては使えなかった。まだ工事中であった。

生徒募集は、中1から高1まで同時に採用するが、中2以上は、帰国生と外国籍を持っている人にしか呼びかけられなかった。中1の一般生については、学年進行なので、15名だけしか合格者として発表できない。それでも、期待が大きかったのか、募集要項の発行部数から判断して相当数の受験者が見込まれた。会場設定は受験者数を想定しないと決められない。結局は、阪急電鉄京都線の正雀駅近くの運転訓練所を借用することにした。何人が受験したかは覚えていない。教員予定者の方には、なるべく集まってもらった。阪急の人たちにも可能な範囲で応援して頂いた。応募倍率は、大阪の私立中学では一番高くなった。補欠も発表したが、補欠1番の人にも順が回らなかったのは、予想外であった。

一方、帰国生の広報活動には、三和銀行から出向していた理事と私で海外のいくつかの都市を回った。試験場もロサンゼルス、ニューヨーク、ロンドン、シンガポールなどのホテルのイベント会場を借りて実施したが、こちらは合格しても辞退者が多く出た。

高1は20人足らずの出発であったと思うが、それでも3年後には、大体本人の志望する大学へ進んだ。関西圏の大学が多かったが、首都圏の慶應義塾大学などへの

進学者もでた。アメリカの大学へ進んだ者もいた。語学力がある上、高校生としての国際的な教養を身につけていれば、合格者が多く出るのは当然である。

⑤図書館などの整備

図書館の図書も事前に用意し、名簿を府の学事部に提出すると同時に、発注もしなければならない。和書については、当時、ICU高校の司書教諭であった校長夫人に依頼しておいた。中高生に必要と思われる図書名を書き出していたのである。

洋書については、OISの高校長夫人がライブラリアンであったので、購入希望図書名を書き出し、アメリカのISS（International Schools Services）に発注した。船便なので到着には時間がかかるが、価格に割引があったのは有り難かった。

図書の分類は、日本式分類と国際式分類では番号の付け方が異なる。生徒たちはやがて大学へ進学することを考えると、OIAは日本式のNDC、OISは国際式のDCの分類を選ばざるを得なかった。少々分類は異なっても、なるべく同じ内容の本は近くに配置しようということで落ち着いた。司書の苦労のほどは分からない。

図書に限らず国内で購入するよりも、米国から購入した方が格安な設備・備品も多かった。フィットネス・センターの諸設備、幼児部の遊具などである。国内では、まだ普及していなかったもので、船賃を含めても外国から購入した方が安かったのである。

⑥スクール・カウンセラー

カウンセラーの先生とクラス担任の役割の違いについては、当初はなかなか理解されなかった。担任は、何でも知らなければいけないと思ったのであろう。次第にカウンセラーのことを理解するようになると、カウンセラーなしでは、この学園が成り立たないことがよく理解された。準備段階では、財政を担当していた阪急の人も、文部省基準ではカウンセラーは必要ないと言ってきたが、専任教員を一人減らしてでも、このような学園にはカウンセラーは必要と主張したので、それ以降は、言わなくなった。

カウンセラーには、よい人が得られたと信じている。開校後、カウンセラーは忙しくなるが、本来暇な方がよいと話していた。生徒たちの心のやまいは、かかってからでは治療が難しいので、なるべく事前に対処してほしい。そのため日常の生活から生徒たちをよく見てほ

しいと依頼した。非常勤では無理なことだと思っていた。

⑦コンピュータ

コンピュータは、何処の機種にするかいろいろな意見が出た。IBMかマッキントッシュかという議論が多かった。結局、事務室で処理する項目は多いだけに、容量の大きいIBMの器械を導入した。高等部のパソコン室にもIBMのパソコン、OISの低学年の部屋には、アップルのパソコンを多く入れた。各教員の机にはIBMありマッキントッシュありで、使いやすいものを各自で使うという状況であった。後には、教員は全員共通のパソコンを導入し、校内の連絡は、ほとんどパソコンによった。

コンピュータの指導教員は、アメリカ人をお願いしたが、ブラインド・タッチが大切だという。日本語だと漢字変換を間違えると意味不明になるので、日本人の教員の指導も必要だった。教員の免許状が、また問題である。日本では、コンピュータ科もなければ情報科も設定されていなかった。アメリカの免許は持っていても、日本では通用しない。臨免を発行してもらうにしても、大学での取得単位が合わないので、臨免も発行されなかった。

それにしても、時間割にもコンピュータの導入が必要になったときには、私の時代は終わったと思わざるを得なかった。

⑧外国人教員の契約内容

外国人教員は、原則として短期雇用である。学校法人との契約が必要である。契約内容は、主として、OISの校長が作成した。東京のアメリカン・スクール・イン・ジャパンの契約内容を知っただけに、それに準じたのである。それでも在外手当をはじめとして、待遇に関する諸規定を決めることは容易ではない。英文だけでは、理事会の理解が適切に得られるかどうか分からない。日本語にしてみると、今度は日本人の側と比較してみたい。双方のバランスも考えなければならない。

校長の任期は、3年が普通らしい（再任は妨げない）。日本側は4年である。はじめは、この違いに無頓着であっ

たが、実際に適用されてからは、このずれはよくないと思って、日本側も3年にした。そのため、私自身も予定より1年早く退職することになった。

後日になるが、2年ごとの契約といっても、査証には1年ごとに契約書が必要なので、毎年全員の書類に署名

をしなければならない。これは、結構手間のかかる仕事であった。

⑨教員の住宅

校長住宅としては、はじめは池田市内のある住宅が想定されていた。住宅地であるし、阪急の池田文庫にも近い。準備期間の前半のほぼ1年間はそこを使用した。住宅としては、申し分のないところであった。ただ、インターナショナルスクールと共存ということになると、校長住宅を開放して、クリスマスや新年などにはパーティを開いたりする。池田の住宅は、そこまで考えられていなかった。個人の住宅としては申し分ないが、校長住宅としては、広い部屋がほしいと申し出ざるを得なかった。すると、幸いなことに、学校予定地の近くの阪急が開発した住宅地の一つにモデル住宅として利用していた住宅を家具ともども使用してもよいという。その住宅なら、学校にも近いし、先生方を招いても恥ずかしくはない。即座にお受けした。後で高額な家賃の半額負担に悩まされる羽目になるが、当時はそこまで考えが及ばなかった。開校予定の1年前であった。

インターナショナルスクールの教員のためには、住宅探しが大きな仕事である。阪急の国際学校チームの人たちには、そのような仕事もあった。一人二人ではない。校長住宅としては、阪急が学園の近くに外国人用住宅を多く建てていた。その一つを当てればよい。他の人の住宅は、一軒ずつ離れることになった。広さや家賃も考えなければならない。OISに属する多くの教員の家には、パーティなどで招かれて訪問したことがある。よい住宅が提供されていることに感心した。日本人については、個人的に探せる人が多かった。海外から赴任する人のためには、それなりに考えておいた。家賃を考えると、一戸建ては無理だった。

（次号に続く）

〔筆者プロフィール〕

1934年東京生れ。国際基督教大学（通称ICU）卒。同高校設立準備より帰国生徒教育に関わり、阪急電鉄の招聘により来阪、千里国際学園設立に参加。1998年退職後、外務省大臣官房人事課子女教育相談室長の業務委嘱を受け現在に至る。主な著書、『帰国子女教育の手引き』（文部省）『国際理解教育における国際学校の教育』（エムティ出版）『英対照学習基本用語辞典』（アルク社、監修）『アメリカ合衆国の教育と学習評価』（国際教育交流センター）『はばたけ若き地球市民』（アカデミア出版会）等。

